

世

界遺産

石見銀山遺跡の
調査研究13

Iwami Ginzan Silver Mine Site Research 13

令和5(2023)年3月

島根県教育委員会・大田市教育委員会

世

界遺産

石見銀山遺跡の
調査研究13

Iwami Ginzan Silver Mine Site Research 13

令和5(2023)年3月

島根県教育委員会・大田市教育委員会

■例 言

1. 本書は、島根県教育委員会と大田市教育委員会が実施した令和3年度の石見銀山遺跡関連事業の概要と、県市担当職員及び調査関係者が共同事業で行っている調査研究活動の成果を掲載するものである。
2. 本書の編集は、大田市教育委員会教育部石見銀山課の協力を得て島根県教育庁文化財課世界遺産室で行った。

■目 次

I 令和3年度石見銀山遺跡関連事業の概要

1. 史跡整備事業	3
2. 重要伝統的建造物群保存地区修理修景事業 大森銀山地区／温泉津地区	3
3. 各種会議の開催状況	
(1) 石見銀山遺跡調査整備活用委員会	7
(2) 石見銀山遺跡保存管理委員会	7
(3) 石見銀山遺跡整備検討委員会	7
(4) 石見銀山景観保全審議会	7
資料1 石見銀山入込客数の推移	8
資料2 令和3年度石見銀山世界遺産センター入館者の状況	9
資料3 令和3年度大久保間歩一般公開限定ツアー入坑者数の状況	10

II 石見銀山遺跡調査研究

山手貴生

石見銀山遺跡で出土した鉋山道具	13
-----------------	----

岩橋孝典

石見銀山遺跡石銀地区に所在する篆刻体文字を刻書する墓石について －16世紀末～17世紀初頭における知識層の存在－	23
---	----

間野大丞

石見銀山遺跡周辺の宝篋印塔－搬入品と在地品の調査から－	33
-----------------------------	----

倉恒康一

旧大森代官所表門・門長屋を撮影した新出の古写真について	53
-----------------------------	----

清水佳那子

史料紹介 「笹ヶ谷銅山出役日記」について	縦組1	66
----------------------	-----	----

I

令和3年度の石見銀山遺跡関連事業

Iwami Ginzan Silver Mine Site Research 13

1. 史跡整備事業

令和3年度は、国及び県の補助金を受け、以下の事業を実施した。

1) 石見銀山遺跡落石対策事業(紺屋間歩上地点)

遺跡地内に存在する落石事故発生の危険性が高い箇所について、事故の発生を未然に防ぎ、来訪する見学者等の安全を確保するとともに、落石の発生に伴う斜面等の崩落による遺跡や関連石造物等の損傷・破壊を防ぐことを目的として、対策工事の実施に向けた測量調査を行った。

【概要】

地形測量：2,500㎡

【事業名・事業費】

紺屋間歩上落石対策事業測量業務：3,017,300円

2) 石見銀山遺跡総合整備活用事業(佐毘売山神社)

佐毘売山神社の遷宮に伴い、見学者等が安全に遺跡を見学できるよう、不陸が著しい見学道の整備を実施している(7ヶ年3次)。

【概要】

石垣解体：10.4㎡

施工監理、地下構造解析：1所

【事業名・事業費】

史跡石見銀山遺跡佐毘売山神社周辺

見学道石垣整備工事：7,926,600円

史跡石見銀山遺跡佐毘売山神社周辺

見学道石垣整備工事施工監理業務：2,475,000円

3) 石見銀山遺跡総合整備活用事業(三木屋橋地点)

令和3年8月に発生した集中豪雨により、洗掘を受けた三木屋橋橋脚の護岸について復旧工事を行った。

【概要】

擁壁護岸工：19㎡

【事業名・事業費】

三木屋橋前面護岸災害復旧工事：1,837,000円

4) 石見銀山遺跡総合整備活用事業(清水谷製錬所跡)

令和元年に崩落した清水谷製錬所跡の石垣について、復旧工事を実施するための測量設計を行った。

【概要】

地形測量、実施設計：350㎡

【事業名・事業費】

清水谷製錬所崩落石垣復旧測量

設計業務：4,840,000円

2. 重要伝統的建造物群保存地区修理修景事業

大田市では大森銀山地区および温泉津地区において、町並み保存のために継続して修理修景事業(国庫補助事業)を実施している。令和3年度では、大森銀山地区で1件、温泉津地区で2件の建造物修理

■大森銀山地区



図1 大森銀山地区における修理物件の位置

を行った。また、令和3年度完了時点での特定物件（伝統的建造物）と修理済の総数は以下のとおりである。

大森銀山地区 特定物件数（建造物）：

286件（うち修理済159件）

温泉津地区 特定物件数（建造物）：

133件（うち修理済43件）

1) 岩根家主屋 GiW30(建造物 No.182)／修理

／切妻造、瓦葺、正面・側面下屋付、背面角屋付

岩根家は銀山地区（旧銀山町）の市道銀山線の北側、表通りに面して建つ民家である。切妻造、平入、平屋建てで、正面および北側面に下屋がまわり、背面には2棟の角屋が取り付け、それぞれ風呂・便所と台所を設けている。家屋台帳によれば昭和元年（1926）の建築で、主屋ほか背面に付属する角屋も含め、建具を改造しているほかは、おおむね当時の

構造を良好にとどめており、銀山地区の景観に寄与している。

建物は長年空き家となっていたため、瓦の葺き乱れによる雨漏り、構造材や野地板の腐朽も確認された。また、全体に外壁の傷みもみられたため、今回の修理では屋根替え及び外壁の改修、軸部の修理を実施し、あわせて近年改修されたアルミ製建具を木製建具に復し、町並み景観に配慮した。正面ファサードは、建築当初は濡れ縁に兩戸が建て込まれていることが推定されたが、生活の利便性も考慮し、昭和40年代の古写真に倣ってガラス障子戸とした。

主屋の修理工事は国庫補助事業として実施されたが、主屋北側のブロック塀については、町並み保存にご理解いただいた所有者により修景された。



▲修理前



▲修理後

■温泉津地区



図2 温泉津地区における伝統的建造物と修理事物の位置

**2) 内藤家八番蔵／修理／本町(建造物No.19)木造
二階建、切妻造本瓦葺、(延床面積137.6㎡)**

内藤家住宅は、近世を通じて温泉宿・酒造業を営むかたわら、温泉津村の庄屋も務めた旧家で、温泉津を代表する住宅として大田市指定文化財に建造物指定（令和元年指定）されている。温泉津地区のなかでも本町の一角を占める大規模な商家で、敷地内には近世から近代にかけての建造物群が多く残る。

八番蔵は、梁間三間、桁行六間、二階建本瓦葺、酒造の醸造蔵と目される土蔵で、当屋敷のなかでも主屋とともに最古級の建物だが、経年により雨漏れや柱の座屈が原因で土壁がずり落ち、保存を図る上

で危機的な状況であった。

今回の修理では、八番蔵のみの修理工事を令和2年度より令和4年度までの3カ年で行う計画である。2年次にあたる令和3年度では、前年度の解体調査工事に引き続き、基礎の不陸修正、軸部の損傷部分の補修・取替、屋根工事をを行った後、小舞掻きと荒壁塗まで施工した。

なお西立面は、古写真や痕跡調査の結果と比較すると、数度の改造があったことが判明したが、今回は現状修理として復旧する予定である。最終年次の令和4年度では、内外装の左官仕上げや土間叩き、建具工事等を行い、竣工を迎える予定である。



八番蔵修理前



軸組み完了後



屋根瓦葺中



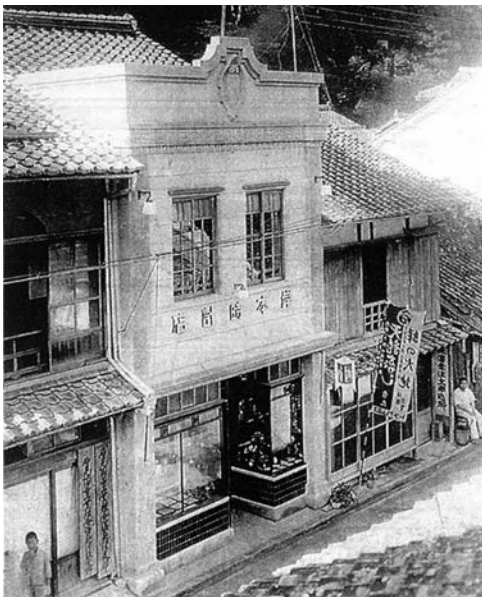
荒壁塗中

3) 森田家主屋／修理／中町（建造物No.67）木造
二階建、切妻造棧瓦葺（延床面積139.4㎡）

森田家主屋は、中町の市道湯乃街線に北西面した間口4.3mの昭和9年（棟札）の町家である。構造形式は木造二階建、屋根は棧瓦葺ですが、正面はモルタルの洗出し仕上げで洋風の外観を表現した「看板建築」で、温泉津の町並みのなかでも特徴的な外観を有している。このたび、空き家となっていた主屋の所有者が変わり、住居としての改修を行うこと

になった。所有者には町並み保存にご協力頂き、建築当時の古写真を参考にして、1階正面は「岸本時計店」のショーウィンドウの外観に復原し、屋根替及び軸部修理等も併せて実施した。

内部の木工事は既存の内装を解体し、屋根工事については新規の瓦で屋根替え、正面の外観は古写真をもとに復原する方針で進めたが、解体工事後に構造上の問題点が確認されたため、補強の方法を検討した。



左上：修理前／右上：竣工
左下：昭和初期頃の古写真
右下：昭和50年頃の写真

修理前は住宅として改修されていたが、古写真を参考にして当初の看板建築に復原。

当初の外観では、一階正面通りには柱及び壁がなく、一階ショーウィンドウが建て込まれていたが、二階のモルタル壁が非常に重いため、そのまま復原すると梁がたわみ、モルタルに亀裂等が生じることが懸念された。そこで、正面の二階床梁について部材寸法の計算を行ったが、従来の梁成では強度が足りないことが判明したため、補強梁を下に受けモルタル下地へ構造用合板貼り、1階ショーウィンドウの内側へ柱（3寸角）を入れ補強する対応とした。

なお補強柱は、なるべく外部に現れないよう、ショーウィンドウの内側へ入れるよう工夫し、整備の意味合いをもたせるため無着色としている。

3. 各種会議の開催状況

(1) 石見銀山遺跡調査整備活用委員会

令和3年度の委員会については、新型コロナウイルス感染症の拡大により、開催を中止した。

石見銀山遺跡調査整備活用委員会 委員名簿

	氏名	役職等
1	太田 洋子	地元有識者
2	大矢 敬子	行政経験者
3	川口 純	DOWA ホールディングス(株) 執行役員
4	苅谷 勇雅	大田市伝統的建造物群保存地区保存審議会委員
5	黒田 乃生	筑波大学大学院芸術系 教授
6	佐々木 愛	島根大学法文学部教授
7	田邊 征夫	(公財)元興寺文化財研究所所長
8	津村真輝子	(公財)古代オリエント博物館 研究部長
9	内藤ユミザベル	日本イコモス国内委員会 理事
10	仲野 義文	NPO 法人石見銀山資料館 理事長
11	中村 哲郎	中村ブレイス(株) 専務
12	松村 恵司	元奈良文化財研究所所長

※任期 令和2年5月1日～令和5年3月31日

(2) 石見銀山遺跡保存管理委員会

会議は実施しなかった。

(3) 石見銀山遺跡整備検討委員会

新型コロナウイルス感染症の拡大により、会議は開催せず、委員による個別指導を実施した。

石見銀山遺跡整備検討委員会 委員名簿

	氏名	住所	区分	備考
1	田中 哲雄	京都府	学識経験者	委員長
2	大橋 泰夫	松江市	学識経験者	副委員長
3	井上 雅仁	大田町	学識経験者	
4	腰原 幹夫	東京都	学識経験者	
5	多田 房明	温泉津町	学識経験者	
6	松本 一郎	松江市	学識経験者	
7	村田 信夫	滋賀県	学識経験者	
8	近江 康忠	温泉津町	地元代表者	
9	田平美佐子	水上町	地元代表者	
10	中村 仁美	大森町	地元代表者	

※任期 令和元年10月1日から令和3年9月30日

(4) 石見銀山景観保全審議会

新型コロナウイルス感染症の拡大により、会議は中止とした。

石見銀山景観保全審議会 委員名簿

	氏名	住所	区分	備考
1	黒田 乃生	茨城県	学識経験者	会長
2	林 秀司	浜田市	学識経験者	副会長
3	周藤 将司	松江市	学識経験者	
4	板倉 裕司	島根県	関係行政機関	
5	清山真理子	島根県	関係行政機関	
6	尾村 七恵	大森町	地元代表者	
7	高橋 泰子	大田町	地元代表者	
8	常松 育夫	仁摩町	地元代表者	
9	友村 光男	温泉津町	地元代表者	
10	福田 満幸	大森町	地元代表者	
11	山下 幸弘	大森町	地元代表者	
12	渡邊 元文	鳥井町	地元代表者	

※任期 令和2年4月1日から令和4年3月31日

資料 1 . 石見銀山入込客数の推移

年度	施設別入館者実数							入込客数公表値 (大田市観光振興課)	備考
	龍源寺 間歩	石見銀山 資料館	世界遺産 センター	大久保間歩 ツアー	旧河島家	熊谷家 住宅	施設実数 合計		
H7	28,037	41,994					70,031	250,000	
8	28,440	42,276					70,716	260,000	
9	34,832	48,081			2,449		85,362	300,000	
10	34,410	39,257			1,615		75,282	280,000	
11	26,690	29,246			1,485		57,421	260,000	
12	30,590	33,832			1,589		66,011	280,000	
13	34,701	30,308			2,882		67,891	300,000	暫定リスト搭載
14	36,464	27,729			2,628		66,821	290,000	
15	40,279	27,441			2,844		70,564	310,000	
16	42,652	26,990			2,437		72,079	318,000	
17	56,567	31,561			3,313		91,441	340,000	
18	95,260	37,730			12,287	38,340	183,617	400,000	
19	363,152	131,866	81,501		36,997	59,085	672,601	713,700	世界遺産登録
20	363,814	104,878	193,781		40,837	50,520	753,830	813,200	
21	239,129	53,603	182,002		14,498	17,684	506,916	560,200	
22	196,495	35,928	129,613		10,698	13,712	386,446	504,800	
23	192,516	36,241	128,416	7,517	15,892	19,369	399,951	498,700	
24	150,529	33,148	110,291	6,808	17,415	20,972	339,163	432,200	
25	186,089	32,941	107,667	6,543	16,346	20,525	370,111	511,600	
26	149,143	27,503	97,232	6,243	12,705	16,565	309,391	437,100	
27	121,153	23,264	87,811	5,448	11,456	15,721	264,853	375,600	
28	101,607	16,485	79,954	4,816	7,328	11,116	221,306	313,600	
29	105,723	23,472	76,100	5,270	7,311	11,627	229,503	324,800	登録10周年
30	79,502	15,365	58,921	452	5,079	11,420	170,739	246,300	
R元	84,705	14,082	64,021	4,814	4,908	11,126	183,656	265,300	
2	57,531	7,783	42,215	2,598	3,691	7,646	121,464	171,000	
3	51,950	6,452	42,907	3,370	3,322	6,875	114,920	165,400	

資料2. 令和3年度石見銀山世界遺産センター入館者の状況

総入館者=42,907人（プレオープンからの累計=1,497,394人 フルオープンからの累計=1,262,020人）

展示室観覧者=24,259人（フルオープンからの累計=638,182人）

※新型コロナウイルスの影響により4/11～5/24の間、世界遺産センター休館。

入館者数・展示観覧者数 *1 平成21年4月1日から外国人の展示室観覧割引制度を開始

(単位:人)

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計
入館者	3,028	4,931	2,433	4,534	4,726	4,122	4,874	5,816	2,520	1,267	328	4,328	42,907
展示室観覧者	1,678	2,210	1,462	2,452	2,457	2,194	3,071	4,110	1,621	668	176	2,160	24,259
有料観覧者	1,341	2,089	857	1,876	2,346	1,696	1,902	2,876	1,139	648	168	2,062	19,000
一般	963	1,534	610	1,303	1,569	1,163	1,374	2,040	803	486	119	1,465	13,429
大人	908	1,434	595	1,204	1,380	1,125	1,347	1,970	759	444	115	1,350	12,631
小中学生	55	100	15	99	189	38	27	70	44	42	4	115	798
団体	10	21	37	20	43	65	52	190	43	0	0	22	503
大人	10	21	37	20	43	65	52	189	43	0	0	22	502
小中学生	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1
その他割引利用	363	492	194	526	702	438	465	639	283	156	49	564	4,871
大人	327	425	184	453	581	412	435	611	263	149	49	502	4,391
小中学生	36	67	10	73	121	26	30	28	20	7	0	62	480
外国人割引者 *1	5	42	16	27	32	30	11	7	10	6	0	11	197
無料観覧者	337	121	605	576	111	498	1,169	1,234	482	20	8	98	5,259
大人	265	101	107	181	79	161	242	312	125	18	8	61	1,660
小中学生	72	20	498	318	32	337	829	922	357	2	0	37	3,424
イベント	0	0	0	77	0	0	98	0	0	0	0	0	175

		4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計
入館者	R3年度	3,028	4,931	2,433	4,534	4,726	4,122	4,874	5,816	2,520	1,267	328	4,328	42,907
	R2年度	550	222	1,652	3,799	5,281	4,989	5,761	7,505	3,144	560	1,505	4,253	39,221
	対前年度比	550.5%	2221.2%	147.3%	119.3%	89.5%	82.6%	84.6%	77.5%	80.2%	226.3%	21.8%	101.8%	109.4%
展示室観覧者	R3年度	1,678	2,210	1,462	2,452	2,457	2,194	3,071	4,110	1,621	668	176	2,160	24,259
	R2年度	302	83	795	2,091	3,063	2,795	3,926	4,737	1,820	362	842	2,708	23,524
	対前年度比	555.6%	2662.7%	183.9%	117.3%	80.2%	78.5%	78.2%	86.8%	89.1%	184.5%	20.9%	79.8%	103.1%

《参考：外国人割引者》

地域別	H27	H28	H29	H30	R1	R2	R3	累計 H21/4～
東ヨーロッパ	6	10	10	10	6	5	6	142
西ヨーロッパ	97	70	108	121	138	21	19	927
北アメリカ	92	89	65	60	85	27	55	884
中南米	41	15	18	5	21	8	11	146
オセアニア	14	34	33	20	28	6	2	260
東アジア	746	583	570	534	624	73	78	4,931
東南アジア	28	39	70	55	60	35	22	556
南アジア・中央アジア	7	6	21	3	11	2	4	86
中東・アフリカ	2	6	25	3	26	3	0	108
計	197	852	920	811	999	180	197	8,040

資料3. 令和3年度大久保間歩一般公開限定ツアー入坑者数の状況

公開日：4月～11月及び、3月の金・土・日・祝日（12月～2月末日までは休場）

8月10日（火）、8月11日（水）、8月12日（木）

午前と午後 各2回のツアー（1日4回）

定員：各回20名（1日80名）

※新型コロナウイルスの影響により定員各回10名で催行。

●都道府県別 大久保間歩入坑者数

	令和3年度	令和2年度	対前年比	
	人数	人数	増減数	増減率
北海道	27	19	8	42%
青森	0	0	0	0%
岩手	1	1	0	0%
宮城	22	13	9	69%
秋田	2	0	2	0%
山形	0	0	0	0%
福島	10	0	10	1000%
茨城	25	16	9	56%
栃木	10	12	-2	-17%
群馬	28	9	19	211%
埼玉	103	56	47	84%
千葉	87	92	-5	-5%
東京	547	320	227	71%
神奈川	231	179	52	29%
山梨	10	6	4	67%
新潟	5	6	-1	-17%
長野	16	9	7	78%
富山	9	5	4	80%
石川	12	9	3	33%
福井	7	12	-5	-42%
岐阜	29	28	1	4%
静岡	71	47	24	51%
愛知	214	125	89	71%
三重	5	27	-22	-81%

	令和3年度	令和2年度	対前年比	
	人数	人数	増減数	増減率
滋賀	43	51	-8	-16%
京都	91	58	33	57%
大阪	320	266	54	20%
兵庫	185	165	20	12%
奈良	45	31	14	45%
和歌山	13	14	-1	-7%
鳥取	86	64	22	34%
島根	326	216	110	51%
岡山	106	98	8	8%
広島	351	273	78	29%
山口	69	74	-5	-7%
徳島	18	21	-3	-14%
香川	27	17	10	59%
愛媛	36	21	15	71%
高知	5	7	-2	-29%
福岡	121	77	44	57%
佐賀	25	6	19	317%
長崎	8	10	-2	-20%
熊本	9	11	-2	-18%
大分	7	7	0	0%
宮崎	4	2	2	100%
鹿児島	4	3	1	33%
沖縄	0	0	0	0%
海外	0	0	0	0%
合計	3,370	2,483	887	36%

●月別 大久保間歩入坑者数

		4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計
R3年度	大人	289	364	167	335	343	304	469	576	0	0	0	325	3,172
	小人	19	13	4	28	43	23	13	16	0	0	0	39	198
	合計	308	377	171	363	386	327	482	592	0	0	0	364	3,370
R2年度	大人	22	0	0	235	466	304	448	533	0	0	0	320	2,328
	小人	0	0	0	11	58	18	13	19	0	0		36	155
	合計	22	0	0	246	524	322	461	552	0	0	0	356	2,483

II

石見銀山遺跡調査研究

Iwami Ginzan Silver Mine Site Research 13

石見銀山遺跡で出土した鉋山道具

山手 貴生

1. はじめに

石見銀山遺跡の総合調査研究は、大きく基礎調査研究とテーマ別調査研究の2分野で構成されている。それらの内、テーマ別調査研究では石見銀山と国内外の諸鉋山との関係解明を目指した「東アジアの鉋山比較研究」を課題の一つとしており、令和2年度からは国内鉋山の道具を比較するためのリスト作りに着手している。本稿では、その一環として集めた石見銀山遺跡出土の鉋山道具の一部を紹介する。

2. 鉋山道具の紹介

(1) 採掘に関する道具

タガネ (第1図1～9、第1・2表)

石見銀山遺跡地内の各地区ではこれまでの調査で31点のタガネが出土しており、それらを集成したのが第1表である。これまでの報告では、タガネとノミは区別が不明瞭な事例もあり、「ノミ状工具」と表記されている例もある。現代的な区分では、ノミは主に木材や金属などを削るために使用される刃先が平らな道具で、タガネは主に石などをはつるために使用する先端のとがった道具とされる。ただし、ノミとタガネは時代・地域によっては厳密に区別されないこともあるようで、近世の鉋山道具を紹介した「銀山諸事ニ付認書差上控」(「山中家文書」所収)の、タガネに相当するとみられる「鉄子」の付近には「鑿共云」とも記述されている。また、英語ではタガネ・ノミとも chisel という単語であることから、いずれも類似した道具と認識されているようである。そのため、本稿ではノミ状工具と報告されたものも含め、ひとまずは全てタガネとして整理した。

タガネは大きさや平面形・断面形・殴打痕の有無などにより分類することができ、中でも殴打痕は当該資料の使用状況を示す証拠として注目される。た

だし、遺存状態が良くない資料もあり、特に上半部が欠損している資料は本来の大きさの想定も難しい。そのため、今回は点数が限られるものの遺存状態が良好で、形態的にもタガネとして利用された可能性が高い10点を選別してその傾向・特徴を記載する(第2表)。ただし、6は形態が他の資料とは大きく異なっており、断面扁平であることからクサビの可能性も考慮されるため、検討からは除外する。10点の内1点(第1図6)は頂部が欠損しているため殴打痕は確認できないが、残存部の先端が外側にやや開いており、本来は殴打痕があった可能性が高い。

形態はいずれも棒状であることが共通している。断面形は、正方形・長方形のものが多くを占めるが、円形や扁平・多角形のものも含まれている。大きさは、長さが4.5～20.6cm、幅・厚さが0.8～6.0cmと幅があるが、プロポーションはほとんどの資料で長さが幅・厚に対して3～4倍程度に収まっている。一方、栃畑谷で出土した2点は例外的に長さが幅・厚に対して約9倍(第1表22、第1図6)、約20倍(第1表21、第1図5)と極端に細長い。用途に応じて大きさの異なるものが使用されていた可能性もあるが、これらは明治時代の藤田組に関連する遺構から出土したものであるため、単純に時期差によるかもしれない。また、出土谷で出土した18(第1図4)は長さ・幅・重さとも極端に大きく、他の資料と同様の用途であったとは考えにくい。先端が扁平になっていることなどから、石切場などでの使用が推測される。

先述の「銀山諸事ニ付認書差上控」には、鉄子の大きさは「長五寸位(約15cm)」とあるが、長さが15cmを超える出土資料は全体でも8点(約26%)、検討対象とした10点の中では4点(約40%)と比較的少なく、使用により消耗した可能性もある。

タガネは年間に1万本消費されたとされる消耗品のため、多くは使用後に廃棄されたと考えられる。集成した31点中にも先端部を欠くものや、逆に先端部のみ遺存している例が11点と多く含まれることは、使用による消耗や欠損の頻度も反映しているとみていいのではないだろうか。

小槌・ツルハシ（第1図10～14）

小槌（第1図10）は宮ノ前地区1区で1点出土しており、長さ4.9cm、太さ1.2～1.4cmである。

ツルハシとされる資料は石銀千畳敷南向山（第1図11）と、石銀藤田地区の坑口前トレンチ（第1図12）、宮ノ前地区4区（第1図13）、大森座南地点（第1図14）で1点ずつ出土している。

石銀千畳敷南向山の資料は現存長14.5cmだが、全体が激しく錆びているため原形は不明である。以前の報告には、形状が史料の「鶴嘴」に類似すると記述されている。この史料とはタガネの項でも参考とした「銀山諸事ニ付認書差上控」と思われるが、この文書には「鶴嘴」という表記はない。形態的に類似する「鶴の箸」ではなかろうかと推測される。

石銀藤田地区の資料は長さ11.7cm、幅2.0cm、厚さ1.0cmで、刃部の消耗が少ないことからあまり使用されていない可能性があると言われている。小型品だが、観察所見のとおりならば、使用に伴う磨滅によって小さくなっている可能性は低い。

宮ノ前地区の資料は長さ12.3cm、幅2.3cm、厚さ1.9cmと、石銀藤田地区の資料と同程度のサイズである。後方が磨滅しているとの観察所見があり、とがった部分で割るだけでなく、平らな部分を用いて鉦石をつぶす作業にも使用していたとも推測されている。

大森座南地点は現在オペラハウスとなっている旧大森郵便局の南側で、浄化槽設置に際して試掘調査を実施した。出土したツルハシは長さ12.7cm、幅3.6cm、厚さ3.8cmと、他の3点と大きく変わらない。ただし、本資料の出土層位からは13世紀代の須恵器も出土しており、注意を要する。

ツルハシと報告されてきた4点（第1図11～14）は、「銀山諸事ニ付認書差上控」の「鶴の箸」に描

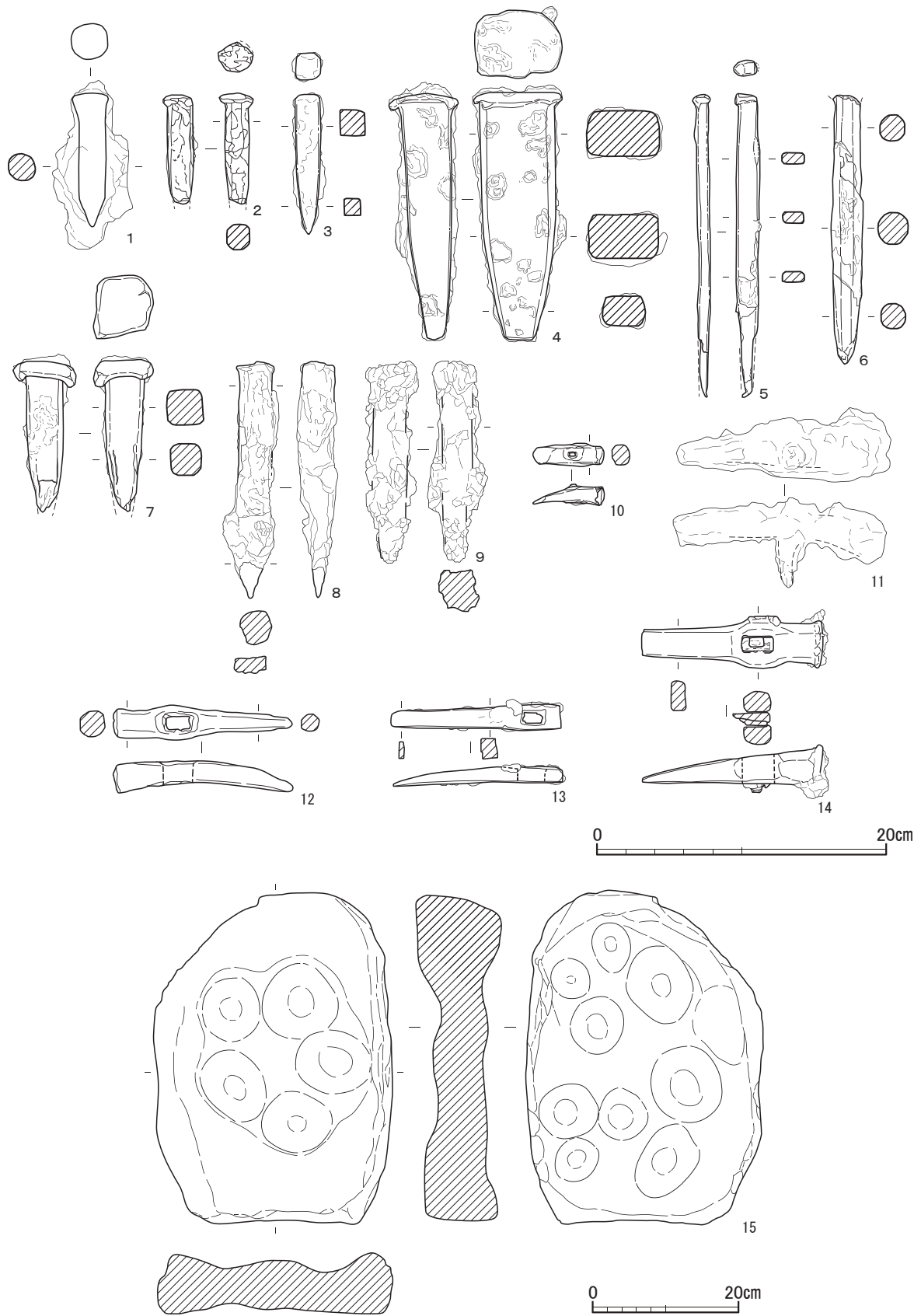
かれた絵と形態的に類似しているものの、そこには「長七八寸位」（約21～24cm）ともあり、大きさにかなり隔たりがある。また、宮ノ前で出土したツルハシは平らな部分にも使用痕が認められており、ハンマーのようにも使われていたことがうかがわれる。11～14は10に比べると大型ではあるものの、同史料に掲載されている「鶴の箸」ではなく、手で鉦石などを砕く「槌」や「小槌」に類する道具とみた方が適切ではないかとも思われる。

（2）選鉦に関連する道具

選鉦とは鉦石を粉にする工程である。他鉦山の事例では、鉦石を唐臼について細かくし、臼でひいて粉にしたとされている。石見銀山でも発掘調査によって回転臼はいくつか出土しているが、多くは食料や茶をひくための生活・文化に関する道具とみられ、鉦石を臼でひいていたことを積極的に裏付ける資料はない。

石見銀山で多く出土・採集している選鉦道具としては「かなめ石」がある（第1図15）。かなめ石は、適当な大きさの石の一部を丸く凹めた石皿状の簡便な石臼で、凹みに鉦石を置いて小槌や叩石状の石棒で叩いて粉碎する。石銀藤田地区では埋置の状態で見出された例もあり、使用場所が固定されることもあったようだが、銀山絵巻には下に筵をひいて使用している様子が描かれているほか、出土・採集した資料には複数の面に凹みが認められることもあるため、移動や回転させながら使用していたとみられる。

平成17（2005）年の集成の際に石材や形状などについて整理されており、安山岩を用いた資料がほとんどであることや、断面扁平で一面に複数の凹みがあるもの、一面に凹みは1つだが面全体を皿状に凹ませているもの、断面方形の石に対して多面が使用されたもの、断面が扁平なものなどに分類されている。また、その際には調査地付近に転がっていた鉦石を用いて実験的に粉碎が試みられており、ツルハシ状の道具では硬い鉦石であるほど激しく飛散するが、ある程度小さくなったものは叩石状の石棒で容易に粉碎できるとの所見が得られている。さらに、



第1図 石見銀山遺跡出土鉱山道具実測図①

第1表 石見銀山遺跡出土タガネ一覧①

番号	挿図番号	出土地区	大きさ (cm)			形態			残存状況
			長	幅	厚	平面形	断面形	殴打痕	
1	1	山吹城跡下屋敷	7.4	2.4	1.8	棒状	正方形	○	先端部欠
2		山吹城跡下屋敷	7.4	1.7	0.6	板状	扁平	○	ほぼ完形
3		竹田	8.2	1.2	0.6	板状	扁平	不明	上半部欠
4		竹田	4.9	0.9	0.4	棒状	長方形	不明	先端部のみ
5	2	竹田	9.0	2.5	2.5	棒状	円形	○	ほぼ完形
6		竹田	5.7	0.9	0.7	板状	扁平	○	ほぼ完形?
7		竹田	4.1	1	0.8	棒状	正方形	不明	先端部のみ
8		竹田	6.2	0.9	0.8	棒状	長方形	不明	上半部欠
9		竹田	3.9	1	0.5	棒状	長方形	○	ほぼ完形?
10		竹田	4.8	1.5	1.5	棒状	正方形	不明	中央部のみ
11		於紅ヶ谷	6.5	1.7	1.2	棒状	長方形	不明	先端部のみ
12		於紅ヶ谷	12.5	1.5	1.2	棒状	長方形	不明	上半部欠
13	3	於紅ヶ谷	4.5	1.7	1.1	棒状	正方形	○	ほぼ完形
14		於紅ヶ谷	9.3	1.7	1.5	棒状	長方形	不明	先端部のみ
15		於紅ヶ谷	5.4	1.2	1.4	棒状	長方形	不明	先端部のみ
16		宮ノ前	5	1.1	1.2	棒状	正方形	不明	先端部のみ
17		出土谷	8.5	1.1	1	棒状	正方形	不明	先端部のみ
18	4	出土谷	16.8	6.0	4.5	棒状	長方形	○	先端部欠
19		本谷	15.8	0.7	0.7	棒状	正方形	不明	上半部欠
20		大龍寺谷	33.1	1.4	1.2	棒状	正方形	不明	上半部欠
21	5	栃畑谷	20.6	1.5	0.8	棒状	長方形	○	先端部欠
22	6	栃畑谷	18.2	2.2	2	棒状	八角形	不明	上端部欠
23		栃畑谷	23.3	1.4	1.4	棒状	円形	不明	上半部欠
24	7	栃畑谷	10.2	2.6	2.4	棒状	正方形	○	先端部欠
25		本間歩上	18.0	3.9	3.8	棒状	正方形	不明	中央部のみ
26		本間歩上	15.8	0.7	0.7	棒状	正方形	不明	上半部欠
27		釜屋間歩	9.5	2.0	1.9	棒状	正方形	不明	上半部欠?
28		釜屋間歩	11.2	3.1	3.5	棒状	正方形	不明	上半部欠?
29		石銀藤田	10.0	1.9	2.0	棒状	正方形	○	ほぼ完形
30	8	清水谷製錬所跡	16.1	4.6	2.8	棒状	円形	○	ほぼ完形
31	9	昆布山谷地区	13.7	4.1	3.6	棒状	正方形	○	ほぼ完形?

第2表 石見銀山遺跡出土タガネ一覧②

番号	挿図番号	出土地区	大きさ (現存)			プロポーシオン			形態			残存状況
			長	幅	厚	長幅比	長厚比	平均値	平面形	断面形	殴打痕	
1	1	山吹城跡下屋敷	7.4	2.4	1.8	3.1	4.1	3.6	棒状	正方形	○	先端部欠
5	2	竹田	9	2.5	2.5	3.6	3.6	3.6	棒状	円形	○	ほぼ完形
13	3	於紅ヶ谷	4.5	1.7	1.1	2.6	4.1	3.4	棒状	正方形	○	ほぼ完形
18	4	出土谷	16.8	6	4.5	2.8	3.7	3.3	棒状	長方形	○	先端部欠
21	5	栃畑谷	20.6	1.5	0.8	13.7	25.8	19.7	棒状	長方形	○	先端部欠
22	6	栃畑谷	18.2	2.2	2	8.3	9.1	8.7	棒状	円形	不明	上端部欠
24	7	栃畑谷	10.2	2.6	2.4	3.9	4.3	4.1	棒状	正方形	○	先端部欠
29		石銀藤田	10.0	1.9	2.0	5.3	5.0	5.1	棒状	正方形	○	ほぼ完形
30	8	清水谷製錬所跡	16.1	4.6	2.8	3.5	5.8	4.6	棒状	円形	○	ほぼ完形
31	9	昆布山谷地区	13.7	4.1	3.6	3.3	3.8	3.6	棒状	正方形	○	ほぼ完形?

鉱石の硬さに応じて凹みの深さが機能していた可能性も指摘されており、石皿状の浅い凹みは小さい力で圧迫して粉成するのに、深い凹みは鎚やツルハシで殴打して粉砕することにそれぞれ有効であったとされている。

第1図15に示したかなめ石は昆布山谷地区の発掘調査で出土した資料で、重量25.6kgを計る。石材の表裏に複数の凹みが認められ、裏返して使用していたことがうかがわれる。

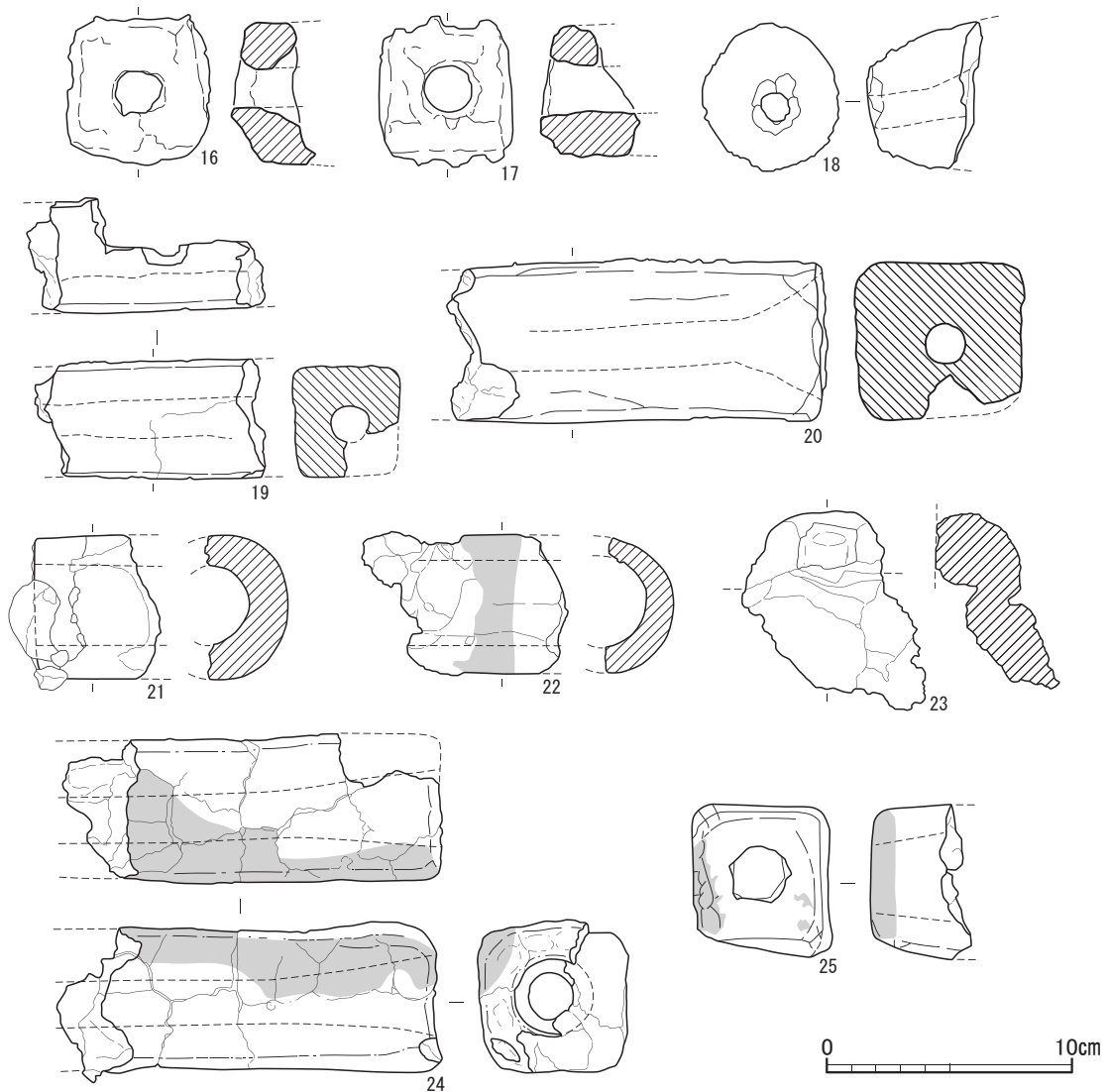
ところで、昆布山谷地区第2地点で検出されたSK03は、凝灰岩とみられる硬い石が埋設されていたことから、かなめ石を用いた粉砕に先立って鉱石を砕くための唐臼跡の可能性を想定している。先述

した実験の所見からも、かなめ石のみでは大きな鉱石を破砕することが困難とみられるため、ある程度大きな鉱石の破砕には唐臼なども用いられていたと考えられる。

(3) 製錬に関する道具

羽口 (第2図、第3表)

羽口は吹子の送風管の先につき、先端が炉内に置かれる道具である。送風装置としての役割だけでなく、炉内で鉱石の溶解とともに溶け出し、溶滓剤としての機能も果たすことが知られている。出土した資料のほとんどは小片で、本来の大きさを復元できないものがほとんどだが、今回は大きさがある程度



第2図 石見銀山遺跡出土鉱山道具実測図②

第3表 石見銀山遺跡出土羽口一覧

挿図 番号	出土地区	検出遺構	断面形	部位	時期	大きさ		
						1辺 / 直径	孔径 (炉側)	孔径 (吹き側)
16	石銀千畳敷	SB02-SX01	方形	炉側端部	17c 前半	約5cm	15mm	—
17	石銀千畳敷	SB02-SX01	方形	炉側端部	17c 前半	約5cm	18mm	—
18	石銀藤田	SB01-SX07	円形	炉側端部	17c 前半	約5.5cm	13mm	—
19	石銀藤田	SB05-SX02	方形	炉側端部	17c 前半	約4.5cm	約1.5cm	—
20	石銀藤田	SB05-SX02	方形	中央部～吹き側端部	17c 前半	約6.8cm	約1.5cm	5.0cm
21	栃畑谷	Ⅱ区	円形	炉側端部	近代	約5.8cm	約3.2cm	—
22	栃畑谷	Ⅱ区	円形	炉側端部	近代	約5.5cm	約3.5cm	—
23	栃畑谷	Ⅱ区	不明	不明	近代	—	—	—
24	於紅ヶ谷	B3-b	方形	中央部～吹き側端部	17c 前半まで	約6cm	—	3.2cm
25	大谷	6T	方形	炉側端部	近世後半以降	4.0～6.2cm	20mm	—

残っている10点を選別した。これらの中には断面方形のものが多いが、石銀藤田地区や大谷地区では断面円形の資料も出土していることから、方形に統一されていた訳ではないことがうかがわれる。なお、栃畑谷地区では近代の藤田組の製錬施設跡が検出されたⅡ区で、3点が出土している。それらの内で形の確認できるものは2点で、いずれも断面・通風孔とも円形である。

遺存状態が良好な資料が少ないため大きさに関する言及は限定的となるが、多くの資料が1辺もしくは直径が5cm前後で、中央に径1.5cm程度の円形の通風孔がある。通風孔の径には送風量を決める役割もあることや、吹きが人力で操作されるため送風量・送風力に限界があることから、羽口の先端は経験的に約3cm（1寸）が基準となることが指摘されている（葉賀1986）。石見銀山で出土した羽口の多くが先端部径約1.5cmとおよそ半分であることから、当地では半寸が基準となっていたことや、他地域に比べて送風能力の低い吹きを使用していたことなどの可能性が考慮される。ただし、栃畑谷地区で出土した近代の羽口は径3.2cm、3.5cmで約1寸と大きくなっている。時期的な違いはもちろんあるが、石銀藤田地区で出土した近世初期の羽口と比べると吹きも含めた送風体系が大きく変わっていることが推測される。

羽口以外の製錬炉に関する資料としては、坩堝、炉壁、土道具（ねこ）などが各地区で出土している

が、いずれも小片である。

その他の鉄製品（第3図）

製精練に関連する鉄製品としては鉄鍋と火箸、板状鉄製品などがある。

鉄鍋は石銀藤田地区、宮ノ前地区、竹田地区で出土している。特に石銀藤田地区で出土したもの（第3図26）は、出土状況や内容物の分析によって灰吹における製錬炉の容器として用いられたことが明らかとなっており、石見銀山遺跡の発掘調査史上最も重要な資料の一つである。片口がつくタイプの鍋で、現状では錆によって分からなくなっているが、X線解析によって3か所に足がついていることが判明している。

火箸（第3図27・28）は石銀藤田地区や竹田地区、植市場地区などで出土しており、特に石銀藤田地区で鉄鍋出土した遺構面から出土したものは、銀山絵巻にみられる精練作業中に炉内の溶解を操作するための道具として注目される。

板状鉄製品（第3図29～31）は竹田地区、於紅ヶ谷地区、出土谷地区で出土した一辺2～17cm、厚さ5mm程度の鉄片である。図示した3点はいずれも竹田地区Ⅳ区で出土したもので、付近で鉄鍋が出土していることから、その破片の可能性が考慮されている。

これら以外の特徴的な鉄製品として、宮ノ前4区の炉跡内から出土した長さ約23cmの資料がある（第



第3図 石見銀山遺跡出土鉱山道具実測図③

3図32)。これは、片側が袋状に巻いており、径2.5 cmまでの木製の柄などを差し込めるようになっているほか、先端部は破損しているものの本来はスプーン状であったことがうかがわれる。形態的に「銀山諸事ニ付認書差上控」にみられる「ちひ」に該当する可能性がある。

(4) 近代製錬に関する道具類

近代の鉱山関係資料としては、清水谷製錬所跡の発掘調査で坩堝やキューベルなどが出土している。また、近年大久保間歩に現存しているトロッコの枕木に犬釘が打ち付けられたまま遺存していることが確認された。この発見を受けて過去の出土遺物を見直したところ、清水谷製錬跡の出土遺物にも犬釘が含まれていることが判明した。また、トロッコ軌道のレールの一部も出土していたことが確認できた。

坩堝 (第4図33～36)

坩堝は、内部に金属成分が残っている資料があることから、鉱石の溶解に使用されていたと推定されている。大きさ・形態から大小の2種類に分類できるとされているが、それらの機能的な使い分けまでは明らかとなっていない。未報告ではあるが、内容物の一部に蛍光X線による元素定性分析を実施しており、鉛・銀・鉄などが検出されたことから、銀製錬に使用された可能性が指摘されている。

キューベル (第4図37～40)

キューベルとは牛骨の灰などを固めた皿で、鉱石中に含まれる金属の量などを分析するための道具である。清水谷製錬所跡の発掘調査では廃棄されたものや、建物基礎の下敷きとして二次的に利用されたものが大量に出土している。報告では、サイズをもとに大中小に3分類し、その中でも小に相当するものを平底と丸底に分類している。ただし、丸底の資料は実験により中央部に浸透した金属が固化し、周囲の軟質部分が剥落したことによる変形も考慮されている。用途の性質上大量に消費される道具であり、発掘調査では11,371点を回収したが、大半は現地に

存置している上、埋土内にも多く残っている。未報告ではあるが、2点の蛍光X線分析を実施しており、カルシウム・鉛・鉄などが検出されていることから、鉛を用いた灰吹きに使用された可能性が指摘されている。

犬釘 (ドッグスパイク)・レール (第4図41～43)

犬釘とレールはいずれも明治時代の坑内軌道に関連する資料である。犬釘は枕木をレールに打ち付けるための専用の釘で、レールを押さえる突起が犬の頭部に見えることからその名前がついている。いずれも長さ約8 cm、幅2～3 cm程度で、これまでに大久保間歩～清水谷製錬所跡で36点が発見・採集されたほか、以前に実施された大久保間歩・清水谷製錬所跡の発掘調査で出土していた資料の内、23点が犬釘として再評価された。なお、図示した2点の内、41は大久保間歩、42は清水谷製錬所跡でそれぞれ出土したものである。

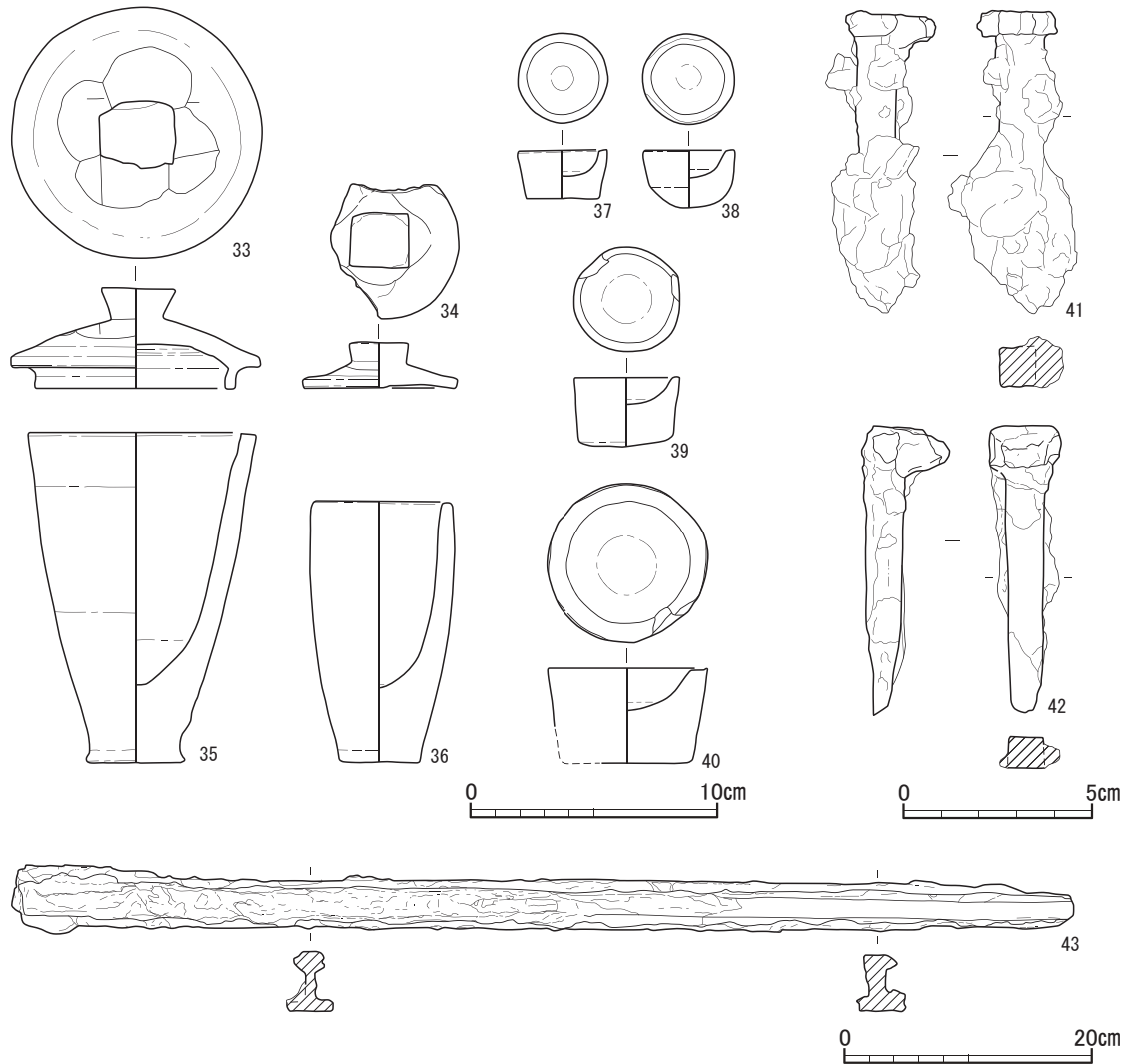
レールも清水谷製錬所跡の発掘調査で出土しており、以前からトロッコ軌道のレールの可能性が考慮されていた資料ではあるが、犬釘の発見に伴う再検討によって確定した。

これらについては産業遺産学会の大島一朗氏による調査の結果、いずれもドイツのKrupp (現thyssenkrupp) 社製で、大久保間歩では明治27 (1894) 年に、大久保間歩～清水谷製錬所跡では明治28 (1895) 年までに敷設され、明治29～32 (1896～99) 年頃には撤去されたことが判明している。

3. 小結

本稿では石見銀山遺跡で出土した鉱山道具類を、採掘・選鉱・製錬・近代関連に分けて紹介するとともに、わずかではあるが検討を加えた。

石見銀山遺跡では継続的に調査を実施しており、その成果として金属生産に係る遺構・遺物も蓄積されてきている。今回はそれらの中でも発掘調査で出土した道具類のみを対象としたが、令和5年度の報告に向けてさらに整理検討を進めていきたい。



第4図 石見銀山遺跡出土鉱山道具実測図④

参考文献

葉賀七三男『考古学と金属生産—遺跡調査の指針—』クオリア1986
 鳥根県大田市教育委員会『石見銀山遺跡発掘調査概要6』1993
 鳥根県大田市教育委員会『石見銀山遺跡発掘調査概要8』1997
 鳥根県大田市教育委員会『石見銀山遺跡発掘調査概要9』1998
 鳥根県教育委員会・大田市教育委員会・温泉津町教育委員会・仁摩町教育委員会『石見銀山遺跡総合調査報告書 第2冊【発掘調査・科学調査編】』1999
 鳥根県教育委員会・大田市教育委員会『石見銀山遺跡発掘調査報告Ⅰ』1999
 鳥根県教育委員会・大田市教育委員会『石見銀山遺跡発掘調査概要10』2000
 鳥根県教育委員会・大田市教育委員会『石見銀山遺跡発掘調査概要11』2001
 鳥根県教育委員会・大田市教育委員会『石見銀山遺跡発掘調査概要12』2002

中田健一「石見銀山遺跡における製錬遺構」『石見銀山関係論集』鳥根県教育委員会2002
 鳥根県大田市教育委員会『主要地方道仁摩瑞穂線（門谷工区）改良工事に伴う石見銀山遺跡発掘調査（一宮ノ前地区調査概報-）』2003
 鳥根県教育委員会・大田市教育委員会『石見銀山遺跡発掘調査報告Ⅱ』2005
 鳥根県教育委員会『石見銀山歴史文献調査報告書Ⅳ』2008
 大田市教育委員会『石見銀山遺跡発掘調査概要20』2011
 鳥根県大田市教育委員会『石見銀山遺跡発掘調査報告Ⅲ』2013
 鳥根県大田市教育委員会『史跡石見銀山遺跡総合整備事業に伴う発掘調査報告書』2013
 大田市教育委員会『石見銀山遺跡発掘調査概要23』2015
 鳥根県大田市教育委員会『石見銀山遺跡発掘調査報告Ⅳ』2019
 大島一朗「石見銀山大久保坑の坑内軌道跡—世界遺産への新たな提案」『産業考古学』第157号 産業考古学会 2020
 鳥根県大田市教育委員会『石見銀山遺跡発掘調査概要29』2022

石見銀山遺跡石銀地区に所在する 篆刻体文字を刻書する墓石について —16世紀末～17世紀初頭における知識層の存在—

岩橋 孝典

1. はじめに

石見銀山の中で、開発初期から銀産出の最重要地域の一角を占めていたのが仙ノ山山頂（標高537m）に近い場所に立地する石銀地区である。標高480～510m付近に広がる平坦地には、銀生産に伴う集落域が展開するが、その周辺の小高い丘の上や緩斜面には16世紀後半から17世紀前半の鉾山師たちが葬られた墓域（石銀地区墓Ⅰ～Ⅴ）となっている（第1図参照）。島根県教委・大田市教委は平成23年度に石銀千畳敷南西に位置する「石銀地区墓Ⅲ」の悉皆調査を実施した。報告書は2012年に刊行されているが、当時は解釈を深める時間も無く、事実報告のみを記載している（原報告とする。島根県教委・大田市教委2012）。

この墓域で悉皆調査した墓塔は少なくとも38基以上であるが、慶長二（1597）年～万治二（1659）年の紀年銘を持つ墓石が14基確認されている。紀年銘を持たない墓塔も組合式宝篋印塔などの型的には16世紀末～17世紀前半代と考えられたことから（島根県・大田市2005）、この墓域の葬地としての活用年代もこの期間に収まるものと推測される。

また、この墓群の墓石戒名の検討から、浄土宗寺院に附属する墓域と想定されている。永禄元（1558）年に心誉上人専察和尚によって石銀地区に創建され、元禄二（1689）年に現在地の大田市五十猛町畑井に移転した「報恩寺」がその有力候補と考えられるが、現段階では検証が困難である（島根県教委・大田市教委2012）。

さて、ここで紹介する篆書体の文字を刻書した墓石は少なくとも2個体が存在する。一つは原報告書の第16図9-4、もう一つは第17図10-5である。いずれも破損しており、9-4は本来の字形が判読できな

い。また10-5は墓塔石材の四周のうち一辺しか残存していないなど断片の状態である。

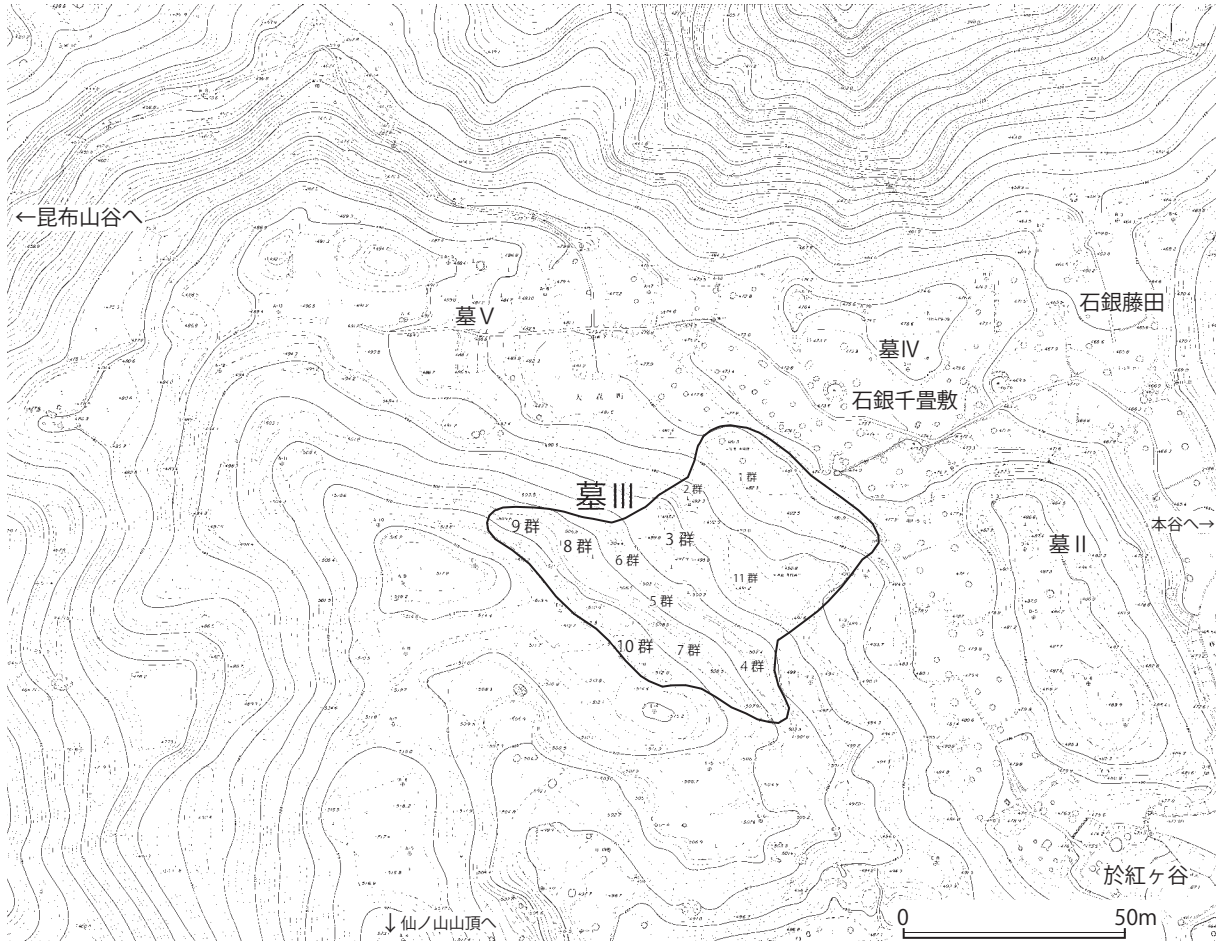
このような断片的な資料であるが、仙ノ山山頂に近い鉾山町に当時の日本国内では馴染みのない篆書体の銘文が存在することは、石見銀山と海外の関係の一端を示す重要なことと思われたため、改めて紹介したい。

2. 篆刻体刻書をもつ墓石の概要

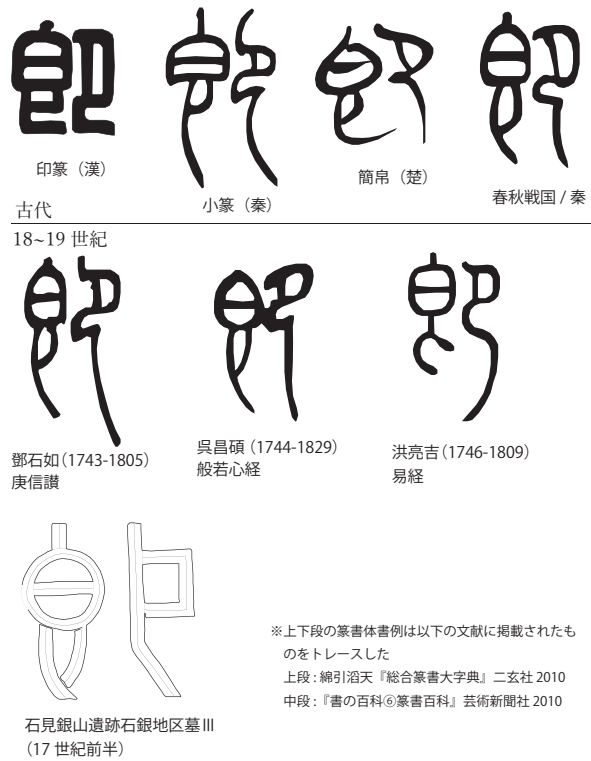
石銀地区墓Ⅲは、石銀千畳敷地区の平坦地から南西側の丘陵斜面（標高は480～513m）に位置している。斜面を5～6段の雛壇状に形成して、1～10の小支群に分かれて墓域が造られている。ここで紹介する9群・10群は石銀地区墓Ⅲの中で最も標高の高い地点に位置している。

10群では、組合宝篋印塔の笠部が2基（10-1・2）確認されている。篆書体刻字のある10-5の部材は、石材の縦サイズが31cm、横方向は両端が破損しているが23cmが残存している。10-5が塔身の一部であるとすれば、当墓域で最大規模の笠部10-1（最大幅59cm）と組合うことが考えられる。各部材の比率を勘案すれば総高2m近い大型の組合宝篋印塔に復元することができる（第3図）。

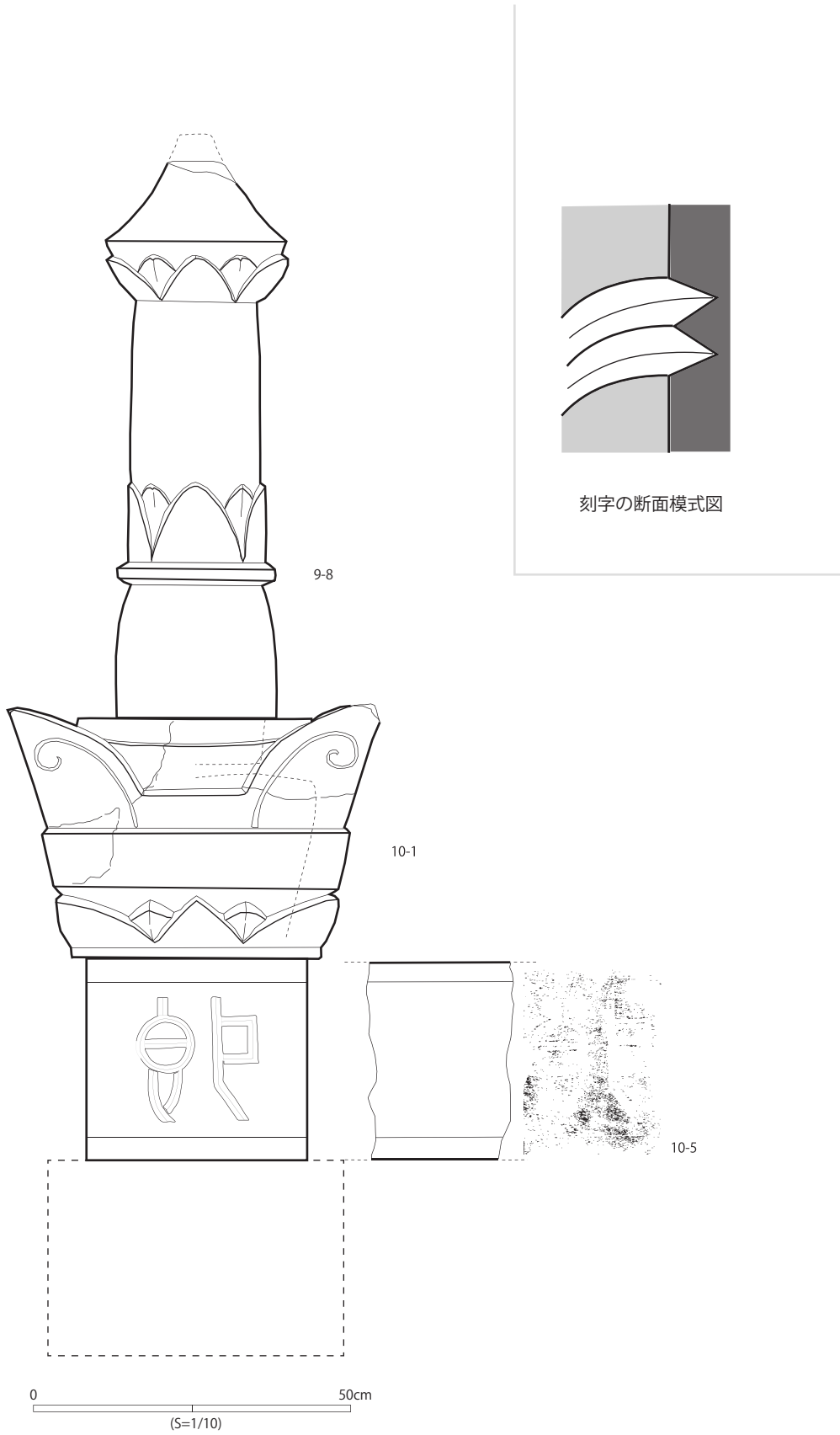
10-5に残された文字の大きさは縦19.7cm、横19.2cmと左右上下がほぼ均等であり、かつサイズが大きいため、この面で一文字が当てられていると考えられる。この刻字は、『卽（即の旧字）』という漢字の篆書体と考えられる。文字の彫り方は、中央に稜線が残る菱合い彫りである。石見銀山遺跡周辺で普遍的にみられる石造物の刻字は薬研彫または丸彫であるが、それとは異なり谷部二線・山部一線の多重線による表現となり重厚感がある。字体は線の太



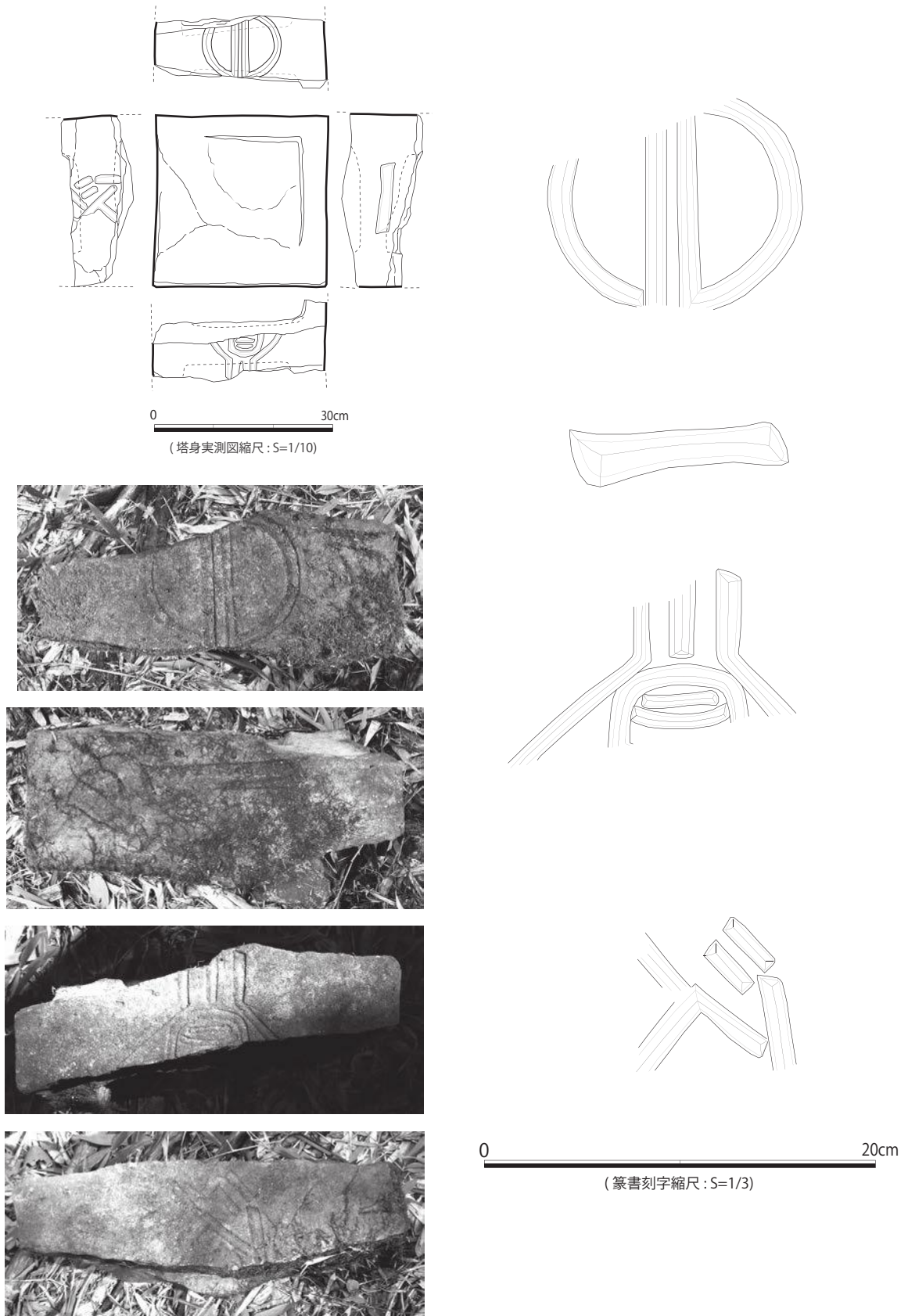
第1図 石見銀山遺跡 石銀地区墓IIIの位置



第2図 石見銀山遺跡 石銀地区墓IIIの篆書刻字墓石 (右) と「即」字の篆書体諸例 (左)



第3図 宝篋印塔推定復元図 (各部材の組合せは、石銀地区墓Ⅲ内のものでバランスの取れたものを用いている)



第4図 石見銀山遺跡石銀地区墓Ⅲ 塔身9-4(篆書体刻字) 実測図および写真

さが均一で硬く、古代の小篆や江戸時代後半以降の篆書体と比較して美しさや流麗さに欠けていて、字形としても正しいものではないと指摘される（第2図参照）。

現在の篆書では、起筆と終筆は丸みを帯びるとされるが、本作例では角張っている。また、ふしづくり「卍」は右上・右下の隅部が角張ったように表現されており、篆書本来の特徴である円筆が徹底されていないことは確かに字形の不完全さを示すものである。

左上の「白」の線形が円形化している点は春秋戦国篆や簡帛（楚国）、印篆（漢）に近く、ふしづくり「卍」の表現が直線的になる点は印篆などに似た後出的な要素である。また、小篆以降の篆書体に特有な縦長の字形ではなく、上下左右長がほぼ揃っていて、字厚がほぼ均等という点は印篆に近い特徴である（綿引2010）。字形や菱合い彫りという刻字技法など、いずれも中国・日本のどの時代の篆書体例にも近似したものは見られないようだ。

篆書体としては、芸術的な巧緻さに欠けるという点が、制作者の篆刻そのものへの造詣の浅さを示している。制作に関わった人物が篆書体の文字を自在に操ることができるわけではなく、手探りで制作したことも考えられる。菱合い彫りという刻字技法についても類例が少なく、孤立的な作例という印象を受ける。

石造物 8-8 は、通常の楷書体刻字で石塔基礎の四面に「○」「卍」「佛」と刻まれる（一面は欠損）。墓石に刻字される文字として仏教用語が推定されるが、該当するものでは「卍心卍佛」などが考えられる。

石銀地区墓Ⅲ内でみられた上記の例から、10-5の銘文は「卍心卍佛」、あるいは同意の「卍心是佛」、「卍身菩提」などの仏教用語が本来のものであったと考えられる。

ちなみに石銀地区墓Ⅲの墓石で通例見られる文字は「キヤ・カ・ラ・バ・ア」「キリーク（阿弥陀如来）」「サ（聖観音）」「サク（勢至菩薩）」「ア（大日如来）」などの梵字のほか、「空風火水地」、「佛」などの楷書体で刻字された漢字がある。また、戒名と

年号も同様に楷書体の漢字で刻字されている。

9群では、組合せ宝篋印塔の塔身残欠と見られる9-4の四面に篆書体刻字がみられる（第4図参照）。「卍」「覺」「一」「○（判読不明）」の文字が10-5と同様に菱合い彫りで刻まれている。「卍」は「圓」の略字あり、篆書体としては類例が少ない。また、「覺」は「覺」の略字であり、古代文字の篆書体で略字を使用する例が少ないため、これも類例がすくない。「一」は「弌」の略字であり、本例では両端が太く、中間が細くなる楷書風に表現されている。

この文字列の意味は不明であるが、「圓覺」は唐代に成立したとされる仏教経典の圓覺経などに由来すると思われる。「圓覺」は完全円満な悟りを表すとされる。圓覺経は、中国では宋、元、明代にも広範に読まれていることから、同時代の中国人知識層の思想としても重要なものである。

本作例は、「卍」「覺」などの略字から篆書体を起こすなど、定石を度外視した作字とみられ、芸術的な巧緻さには欠ける点も、10-5例と通じるものがある。

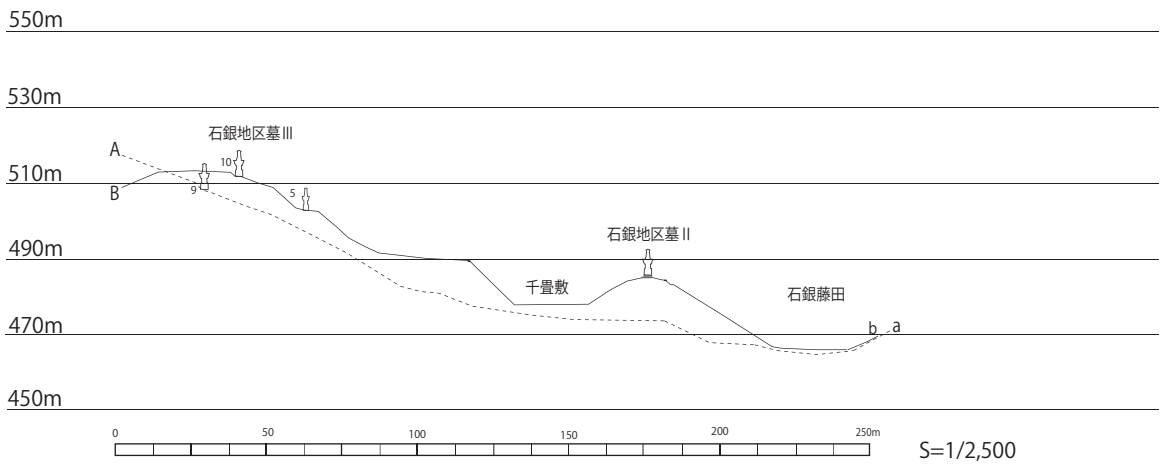
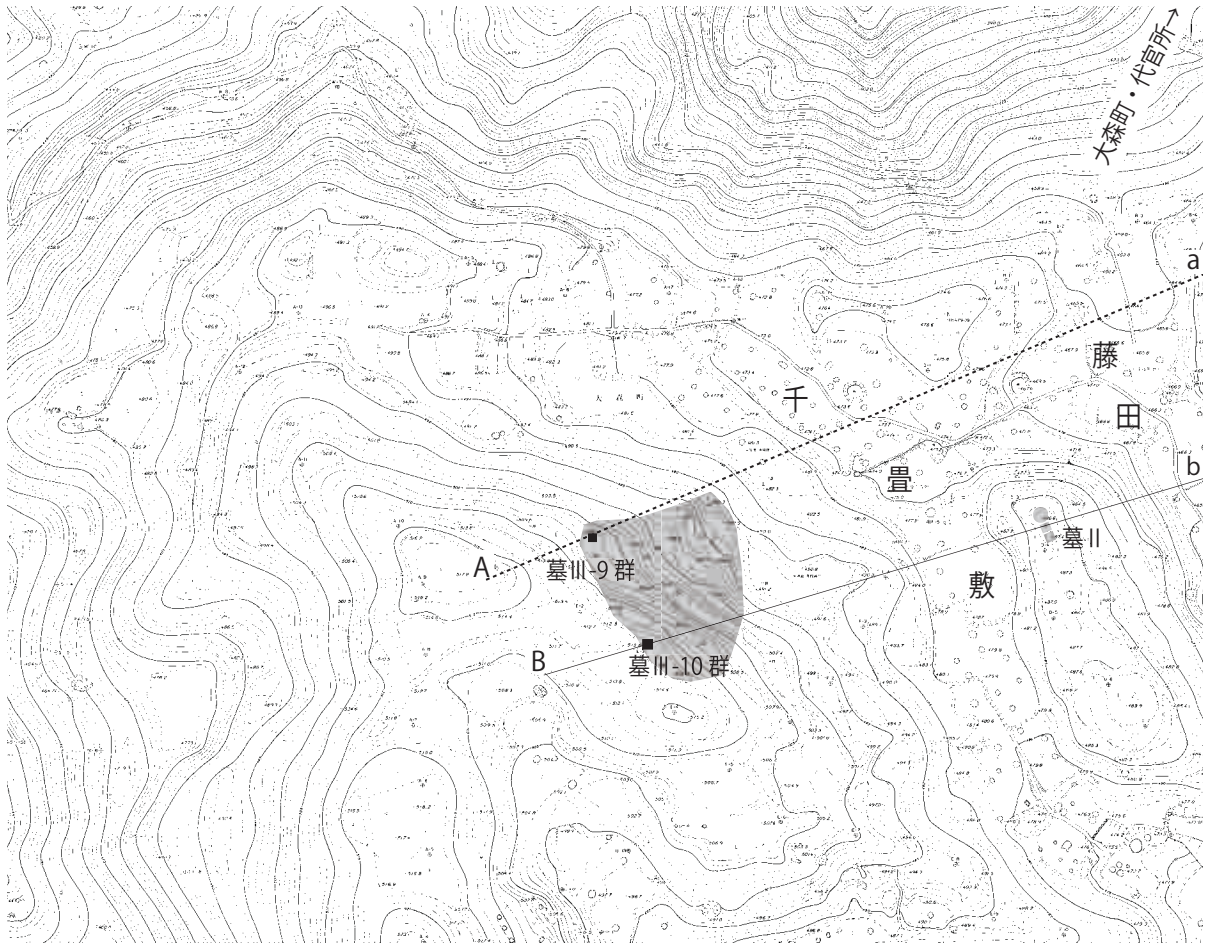
10-5と9-4は、組合せ式宝篋印塔の塔身の四面に各一文字を篆書体で刻字する点や、類例のない菱合い彫りである点が共通している。石塔を造立した、あるいは葬られた人物にはなんらかの共通する信仰・思想的基盤があったものと推察される。

3. 16世紀末～17世紀前半の日本国内における篆刻書体の状況

日本では、唐の影響を受けて律令期に天皇御璽、国印、寺印などが盛行しているが、その後は花押文化に押されて篆刻体は衰退している。

室町～戦国期の日本では、大名や武将の印章に篆書体（篆刻）が用いられている。代表的なものに織田信長の「天下布武」印などが著名であろう。

しかしながら、日本の中世において篆書体は一般的に石造物や文書に使用される字体としては普及しておらず、一般の人々はもとより支配階層や知識階層においても使用されることは印章類などの極めて限定的な存在であった。



第5図 仙ノ山 石銀地区の17世紀の墓地と生産・集落域の位置関係図
 ※宝篋印塔の縮尺は任意

◆石銀地区墓Ⅱは、本谷と於紅ヶ谷の結節点に位置し、石銀藤田地区と石銀千畳敷地区を俯瞰することができる。また、大森町の代官所、城上神社、観世音寺なども視認できる。墓Ⅱは、南北60m 近くある丘陵頂部平坦面の最北部に3基近接して築造される。石見銀山遺跡では稀であるが、ズリを盛ったマウンド上に組合せ宝篋印塔が造立されている。このような築造状況から石銀地区への俯瞰だけでなく、大森町からの視認性を強く意識した墓と考えられる。

◆石銀地区墓Ⅲは、石銀千畳敷地区を見下ろす位置に占地している。現在は竹林に覆われ視認性は不明であるが、樹木が無い状態であれば墓Ⅱ同様、大森町への視界が確保されているかもしれない。なお、両墓地ともに休谷方面への視界は、手前の尾根にさえぎられて視認することができない。

中国では篆書体は、西周末に大篆として現れ、古代の秦代に小篆が完成した後、漢代には隸書が成立しその簡略形式として楷書・草書などが普及したため、篆書体は衰退する。再び篆書体が注目されるのは明代の文彭やその弟子の何震（徽派）の頃であるが、篆刻印が主流であり日本への影響はまだ限定的である。

中国で広く一般に篆書体が認知されるのは清代からであり、それまでは中国においても希少種の字体であった。このため16世紀後半～17世紀前半期における日本国内での篆書体の実例は希少なものとえよう。

江戸時代前・中期の篆書体受容史について概要をまとめた岩坪充雄氏によると、江戸時代初期の慶長11（1606）年には大陸に由来する『四体千字文』が刊行されたとする。ただし、そこに掲載された篆書の形は粗末で、筆意に乏しい字形と断じているが、当時これが版刻されて印刷され日本国内に広められた意義は認めている。

17世紀前半は中国で王朝の交替があった。1616年に太祖ヌルハチが後金国を建て、その子太宗ホンタイジが「清」と改称するのは1636年である。この時、明の遺臣・僧や文物が日本に避難的に流入することもあったと考えられる。1653年に独立性易（臨済宗黄檗派）が、1654年には隠元隆琦（臨済宗黄檗派）が、1659年には儒学者・朱瞬水が、1661年には高泉性激（黄檗）が来日するなど禅僧や儒学者を中心とした多様な文化人が来日している。

しかし、篆書の観点で見れば、1659年には『五車韻瑞』が翻刻されているが、楷書見出しの下に、一応篆書も示される程度の粗末なものであったという。

1660年代～1670年代に入って、『説文解字韻譜』（1663年）、『説文解字五音韻譜』（1670年）などが出版され、また明・清からの文化人の来日（長崎）が続いたこともあって、篆刻の辞書、知識が日本国内に普及する端緒となるのが17世紀後半という時代とされる（岩坪2005、2013・曹悦2018）。

日本で篆書体の作例が増加するのは18世紀になっ

てからであるが、石碑としては「鈴近江翁碑」（1693年、竹洞野宜卿筆、千葉縣市川市）、「自墮落先生之墓」碑（1739年、山崎北華筆、東京都荒川区西日暮里・養福寺）、「矢口新田神君之碑」篆額（1746年、松下鳥石筆、東京都大田区矢口・新田神社）、「長楽寺碑」（1768年、藤井西洞筆、京都市東山区円山町・長楽寺）などが知られるが未だ希少例といえる（横山2010）。

4. 仙ノ山山頂の知識人

最盛期石見銀山の仙ノ山・石銀地区の評価については、16世紀後半～17世紀前半の職住一体となった計画的な鉾山町が展開したとされる。側溝を備えた幅の広い道が通されるなど当時の城下町に匹敵する町作りが行われていたとされる（島根県ほか1999）。このような地域に出現した篆刻書体刻字をもつ墓石の発注者はどのような人物なのであろうか。これまで述べてきた事実から、推定されることをあげてみる。

- a 中国出身の技術者（鉾山師・金属加工技術者など）
- b 中国出身あるいは中国に留学経験のある僧などの知識人
- c 日本人で、中国渡海経験のある商人、僧など
- d 日本人で、篆書体の知識を持つ僧、上級技術者など

日本国内で、16世紀後半～17世紀前半の墓塔、石碑などで篆書体の刻字があるものは必ずしも多くはない。石銀地区墓Ⅲに篆書体の刻字のある墓塔を造立した人物像をこれ以上絞り込むことは現時点では困難である。

Cのような海外渡航経験のある日本人は島根県域でも数多くいるものと想定されるが、島根県内で当該期の篆書体刻字のある墓塔の報告は管見のところ存在しない。A・Bのような中国出身の知識人が仙ノ山山頂の墓域に葬られたと考えることもあながち荒唐無稽ではないのかもしれない。Dの日本人の知識階層として、僧侶の可能性はあげられるであろうし、鉾山師においても相当に有識・博識であった人物も存在したものと思われる（第5図参照）。

少なくとも本例は、島根県内では類例を見ない希少なものである。このような状況から16世紀末～17世紀前半の時期に、仙ノ山石銀地区には都市部に勝るとも劣らない知識人の居住を類推するものである。

5. まとめ

平成23年度の石銀地区Ⅲ石造物悉皆調査で確認された篆書体刻字をもつ墓石について、調査当時から他の石造物とは一線を画す異様な存在であり気になるものであった。16世紀後半～17世紀前半の時期の資料において島根県内でこのような篆書体刻字を目にしたことはなく、異質な存在として強い印象を持ったのであるが報告書内では特に言及することもできずお座なりとなっていたものである。

このたび「卽」、「圓」、「覺」の篆書体刻字をもつ墓石について、その有意な意義を確認することができた。石見銀山や温泉津などの石見銀山に関連する港には日本各地のみならずアジア諸地域、欧州から外国人が来ていたことは既に多くの研究者が指摘しているところである（岡2021a,2021b）。彼らは、九州の薩摩、長崎、博多などを經由して石見にやってくるということが考えられる（岩橋2015）。

この篆書体刻字をもたらした人物が、外国人なのか日本人の知識階層なのかは即断できないが、いずれにせよ石銀地区の住人の多様性や高い学識を反映するものであろう。

石銀地区のような山上の鉱山生産域に知識人が居住していたことについては、これまで推測はされていても実証的な資料は少なかった。しかし、例えば「硯」の出土が9点（石銀地区・千畳敷地区）確認されており、これは宮ノ前地区と並んで多いことから石銀地区の特殊性は既に指摘されている（守岡2010）。篆刻書体を刻字する墓石の存在は、これをさらに補強する資料として位置づけられる点に意味がある。

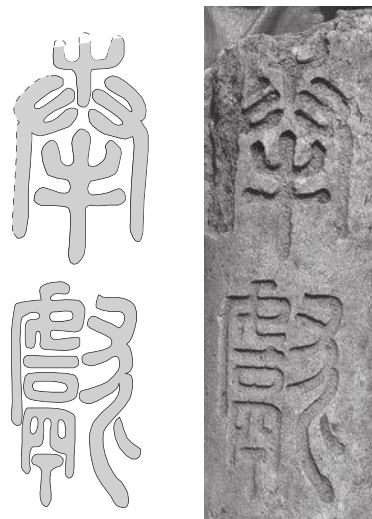
また、日本国内における書道史の中で16世紀末～17前半期は「篆書体」の停滞期の末で、これから再興期に差し掛かる時期に相当する。石見銀山仙ノ山

山頂にてこの時期の篆書体墓塔が存在する意義は書道史の観点から見ても例外的で相当に異質な存在と見てよいのであろう。

過去の石造物調査においては、昆布山谷西側の丘陵上に所在する長楽寺跡で確認された「十」の刻字をもつ特殊型墓標がキリシタン関係者の墓標ではないかと推測されている（島根県2004）。20年以上にわたる石造物調査の蓄積により、海外（の宗教・文化）に系譜を持つ人々や国内でも相応の知識人階層が確実に石見銀山の中で人生を終えるまで活動していたことを示す石造物資料の存在を僅かながら確認することができた。この点は重要であり、今後の調査でも留意すべき点として指摘しておきたい。

本論を執筆するにあたり、尾川明穂（筑波大学芸術系准教授）、中村信宏（台東区立書道博物館）、福田哲之（島根大学教育学部教授）から当該時代の篆書体事例について貴重な教示を頂きました。

本論で紹介した石造物は、本論刊行時点では仙ノ山石銀地区墓Ⅲの原位置に所在している。



第6図 豊栄神社大鳥居の篆書体刻字「奉獻」
（慶応3年2月） S=1/8

参考文献

- 岩坪充雄2005「江戸時代の篆書体受容について－篆書関連書籍の翻刻・出版事情より－」『書学書道史研究』第15号 書学書道史会
岩坪充雄2013「江戸時代の書物と雑体篆書」『書物・出版と社

- 会变容』15 書物・出版と社会变容研究会
- 岩橋孝典2015「16世紀後半における山陰地域水上交通の一断面－島津家久と細川幽齋の旅を題材として－」『日本海沿岸の潟湖における景観と生業の変遷の研究』
- 岡 美穂子2021「世界史の中の石見銀」『令和元年度・2年度石見銀山遺跡関連講座記録集』鳥根県教育委員会
- 岡 美穂子2021「グローバルな視点からみた南蛮貿易と石見銀山」『石見銀山遺跡研究』創刊号 石見銀山遺跡研究会
鳥根県教育委員会・大田市教育委員会・温泉津町教育委員会・仁摩町教育委員会1999 『石見銀山遺跡総合調査報告書第2冊【発掘調査・科学調査編】』
- 鳥根県教育委員会・大田市教育委員会2004『石見銀山 長楽寺跡・石見銀山附地役人墓地（河島家・宗岡家）』
- 鳥根県教育委員会・大田市教育委員会2005『石見銀山 分布調査と墓石調査の成果』
- 鳥根県教育委員会・大田市教育委員会2012『石見銀山遺跡 仙ノ山石銀地区墓Ⅲの調査』
- 曹悦2018「清代中国と江戸日本の篆書比較論：市河米庵『米庵墨談』を中心に」『東アジア文化交渉研究』11 関西大学文化交渉学教育研究拠点編
- 守岡正司2010「石見銀山遺跡出土の石製品－硯－」『世界遺産 石見銀山遺跡の研究』1 鳥根県教育委員会・大田市教育委員会
- 横山淳一2010「訪ねてみよう！『日本の篆書碑』30選」『書の百科6 篆書百科』芸術新聞社
- 綿引滔天2010『総合篆書大辞典』株式会社二玄社

石見銀山遺跡周辺の宝篋印塔

―搬入品と在地品の調査から―

間野 大丞

はじめに

石見銀山遺跡の石造物調査事業は平成9年度(1997)から始まり、今年度で25年を迎えた。これまでの調査研究により、石見銀山の周辺地域(旧邇摩郡・旧安濃郡)における銀山開発以前の石造物の様相を明らかにすることが課題のひとつとなっている。

当研究事業においては、平成27年度に旧安濃郡に所在する中世の大型石塔、令和2年度に保国山金皇寺(仁摩町大国)の石造物群について調査をおこなった(西尾・東山2016、鳥根県・大田市2021、間野・伊藤2022b)。令和2年度からはテーマ別調査研究「港町温泉津の景観と変遷」においても旧邇摩郡の調査を実施し、温泉氏墓周辺の石造物(温泉津町湯里)等について報告をおこなっている(間野・伊藤2022a)。

このほかには今岡稔と今岡(佐藤)利江による報告(今岡2004、今岡・今岡2004、同2011)のほか、発掘調査によって資料が蓄積されている(鳥根県2017、同2019)。

本稿では、令和4年度に石見銀山遺跡周辺で実施した搬入品と在地品に関する調査の成果を報告する(第1図)。なお石造物の石材については、三瓶自然館の中村唯史氏にご指導いただいた。

I 花崗岩製の宝篋印塔

1. 既往の研究

現在のところ、石見銀山遺跡の銀山地区・大森地区では、中世の搬入系石造物の存在は確認されていない。対象エリアを拡げると、東部の三瓶川流域に所在する霊椿山円城寺において花崗岩製と若狭日引石製の宝篋印塔、海岸部の温泉津町において、日引石製宝篋印塔と小型板碑(石仏)が調査されている(今岡2004、今岡・今岡2004、鳥根県2010、鳥谷

2008、間野・伊藤2022a)¹。大田市は中世の搬入系石造物が少ない地域といえる²。

2. 霊椿山円城寺の宝篋印塔

(1) 位置と現状(第1図、写真1~8)

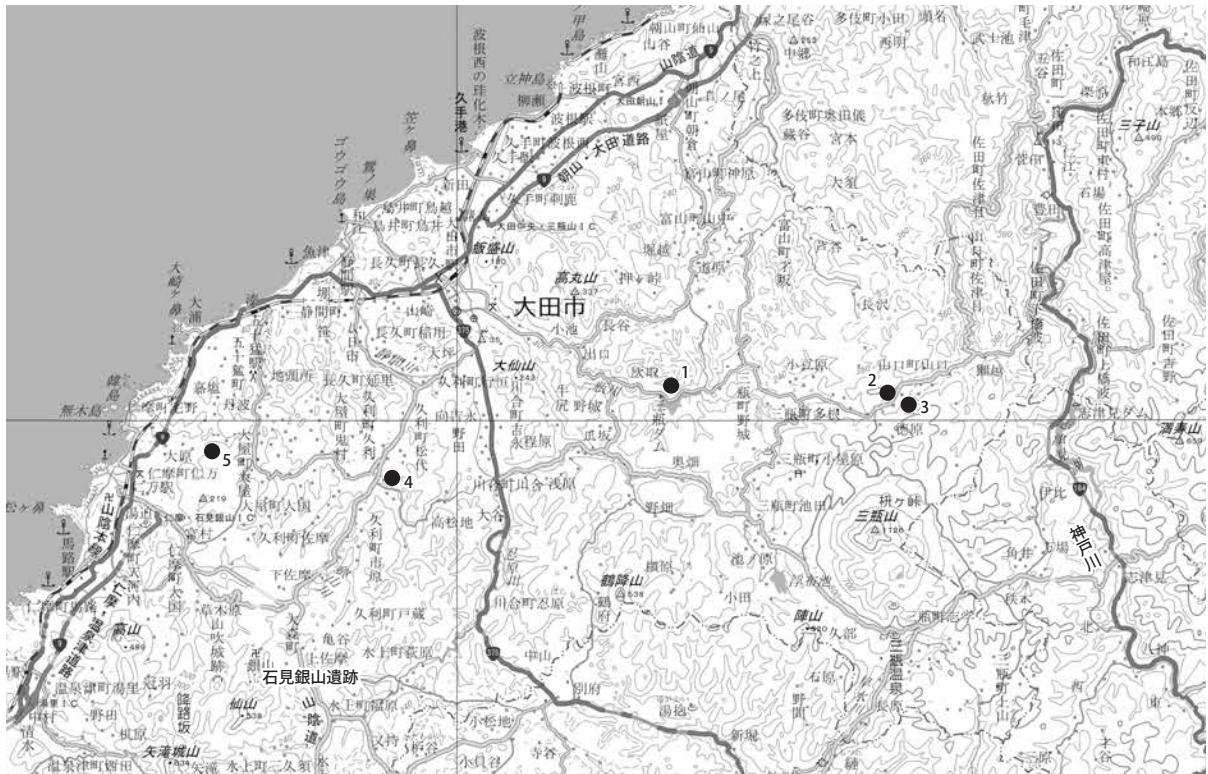
三瓶川中流域の三瓶町野城地区に位置する。承平元年(931)朝満上人の開基と伝えられる天台宗の古刹である。往古は四十八坊あり、三千石の寺領を有していたが、毛利氏・尼子氏の合戦により灰燼に帰したと伝えられる(鳥根県安濃郡1915)。昭和48年(1963)、「円城寺境内」の名称で、大田市の史跡及び名勝に指定されている。

石造物群は本堂前、向かって右側の平坦地にある³。基壇上に7基の宝篋印塔が組み立てられ、相輪1点が横倒しにして置かれている⁴。南西隅から反時計回りに1~7号塔、横倒しになっている相輪を8号塔とした。いずれも本来の組み合わせではなく、異なる石塔の部材が混ざり合っている。石材は花崗岩(山陽)2点、若狭日引石5点のほかは地元でのデイスaito12点・凝灰岩7点・砂岩10点、計29点であった(表1・2)。花崗岩製宝篋印塔1基、日引石製宝篋印塔2基、凝灰岩製宝篋印塔2基、砂岩製宝篋印塔3基、デイスaito製宝篋印塔3基以上が復元できる。紀年銘を有する部材はないが、3号塔の基礎に「逆修 詮舜」の銘文がみられる。円城寺の僧侶などにかかわる石塔群と考えられる。

(2) 花崗岩製宝篋印塔(第2図、写真4・9)

相輪と屋根のみである。

相輪は高さ32.8cmである。宝珠は径7.8cm、高さ5.6cmである。上請花は径7.7cm、高さ3.8cm。単弁八葉に間弁をはさむ。九輪は高さ15.6cmで、幅0.5cmの溝で区画する。下請花は径9.7cm、高さ3.7cm。上請花と同じく単弁八葉に間弁をはさむ。伏鉢は径4.8cm、

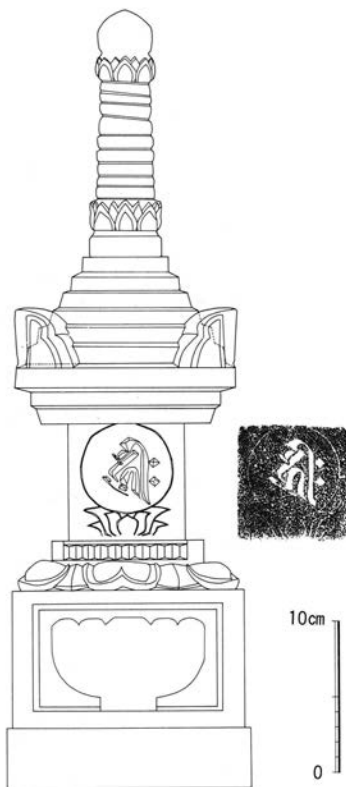


第1図 石造物調査地 位置図 (S = 1 : 200,000)

- ①円城寺石造物群 ②瑞応寺前石造物群 ③殿屋敷遺跡 ④久利町市の上塔 ⑤宅野城跡北麓の石造物群

高さは3.5cmである。

屋根は高さ22.3cm、上面幅11.8cm、軒上幅29.6cm、下面幅21.8cm。軒上に6段、下に2段の段形をつくる。上の段形の高さは2.5~2.7cmで、最上段のみ2.0cmと低い。軒は厚さ3.8cm。隅飾突起は下から3段の段形に取り付く。二孤で軒口の少し内側から、ほぼ垂直に立ち上がり、先端間の幅は29.4cmである。基底部の幅は7.5~7.8cm、高さは4.9cm。四面とも輪郭界線を幅0.5~0.8cmの溝で彫り込み、ふくらみを表現している。



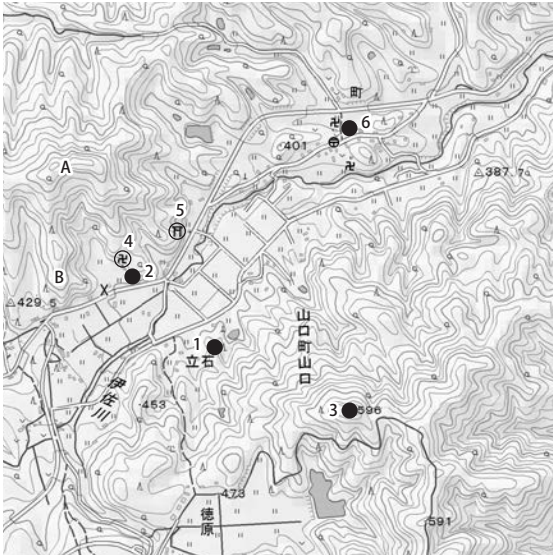
第2図 円城寺3号塔(相輪・屋根)・6号塔(塔身・基礎)(島根県大田市1990を一部改変・縮小)

3. 殿屋敷遺跡と雲洞山瑞応寺前の宝篋印塔

(1) 位置と現状 (第3図、写真10)

殿屋敷遺跡と瑞応寺前の宝篋印塔は、大田市山口町に所在する。大田市南東部に位置し、三瓶山に源を發して神戸川へ注ぐ伊佐川の流域にあたる。この一帯は近世には出雲国神戸郡山口村、明治22年に簸川郡山口村となり、昭和29年に大田市に編入されている。出雲国と石見国の国境の町である⁵。

殿屋敷遺跡は、矢筈山城跡のある山塊から南北方



第 3 図 山口町の石造物及び関連箇所位置図
 ①殿屋敷遺跡 ②瑞応寺前 ③矢筈山城跡
 ④瑞応寺 ⑤山口八幡宮 ⑥十王堂跡
 A 「寺屋敷」カ B 「寺脇」

向に延びる丘陵先端の平坦地に位置する⁶。宝篋印塔は平坦地に祀られている古殿大明神に向かって右横にある⁷。

雲洞山瑞応寺は、殿屋敷遺跡の北西1.0kmに位置する。同寺は曹洞宗総持寺の末寺で、天正7年（1597）創建である⁸。宝篋印塔は、同寺の前を伊佐川に沿って走る県道56号大田佐田線の道路脇に置かれている⁹。

(2) 殿屋敷遺跡の宝篋印塔 (写真11)

屋根のみで他の部材はみられない。四隅の隅飾突起は2個を欠失し、のこりの2個も外弧を欠損している。高さは23.6cm、上面幅11.5cm、軒上幅32.0cm、下面幅23.8cmである。上面には径6.3cm、深さ4.5cmの円形のほぞ穴をもつ。段形は上6段、下2段である。上段形の高さは2.5~3.0cmで、最上段が2.3cmとやや低い。下段形は1.8cmと2.0cmである。軒は厚さ4.2cmで、軒口は直立する。下面には径8.0cm、深さ0.8cmの浅い彫り込みがある。隅飾突起は下から3段の段形に取り付く。二弧で、側面は輪郭を巻く。軒口の少し内側から立ち上がる。幅8.6cm、高さ9.5cmで3~4段目の間までである。

(3) 瑞応寺前石造物群の概要 (写真12)

複数の石造物が幅282cm、奥行き195cm、高さ84cmの石積基壇上に置かれている。

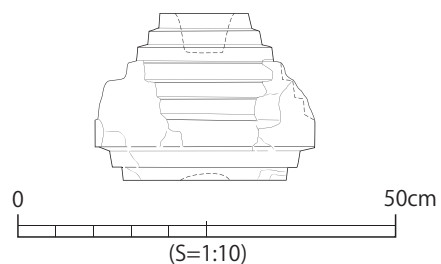
基壇の左端には、一畑薬師灯籠が置かれている。石材は三瓶山のデイサイトが用いられ、高さは105cm、幅55cm、奥行き51cmである。正面に「一畑薬師如来」、右側面には「文久元」「酉秋」「福谷隼人書」「石工弥エ門」、左側面に「立石中 世話人 大國 喜代介」と刻む。文久元年（1861）に立石の地域全体で寄進されたものである。大田市内ではもっとも古い一畑薬師灯籠である（川島・佐々木2004）。福谷家は瑞応寺の東に所在する山口八幡宮の社家で、隼人氏はその3代目にあたる¹⁰。

石碑の右側に、灯籠の火袋・屋根が置かれ、その右に宝篋印塔の屋根がある。宝篋印塔の奥には、石廟に入った地藏仏が置かれる。地藏仏は高さ35cm、幅24.5cm。両手で蓮を持つ。石廟は基壇・壁体・天井石の部材で構成され、総高は86cmである。基壇は幅48cm、奥行き44cm、高さ8cm。壁体はコ字形をし、幅38.5cm、奥行き33.0cm、高さ40cmである。左正面に「願主 田畑」と刻む。天井石は寄棟造で上下の二石からなる。下部は幅36cm、奥行き36cm、高さ11.0cm、底面を彫り込んでいる。正面には四文字を刻むが、風化のため判読できなかった。上部は寄棟で、幅48.5cm、奥行き43.0cm、高さ27.0cmである。

(4) 瑞応寺前塔の概要 (第4図、写真13・14)

屋根のみで他の部材はみられない。四隅の隅飾突起は欠失し、図の背面側は軒上1段目から下位が剥落している。

高さは22.0cm、上面幅11.7cm、軒上幅29.2cm、下面幅21.5cmである。上面には径7.5cm、深さ5.2cmの円形のほぞ穴をもつ。段形は上6段、下2段である。上段形の高さは2.0~2.1cmでほぼ等しい。下段形は2.2cmと1.8cmである。軒は厚さ3.6cmで、軒口は直立



第 4 図 瑞応寺前塔実測図

する。下面には幅6.5cm、奥行き7.0cm、深さ0.9cmの浅い彫り込みがある。隅飾突起は下から3段の段形に取り付く。図の左面は内弧の一部が遺存しており、基底部の幅は7.5cmと推定される。

4. 花崗岩製宝篋印塔の位置づけ

3塔はほぼ同形、同大であり、同時期にもたらされたものと推定される。造立年代は、14世紀後半から15世紀代前半を中心とするものと考えられる。

花崗岩製宝篋印塔は出雲南部（雲南市・奥出雲町・飯南町）に集中的に分布することが指摘されている（今岡2013）。伊佐川流域では神戸川との合流地点に位置する浄土宗智光寺跡石塔群（出雲市佐田町窪田）で宝篋印塔が確認されている（鳥根県佐田町1988、今岡2011）。

こうした分布状況を見ると、円城寺塔および山口町の2塔は、中国山地をこえて神戸川の水運によりもたらされた可能性が高いと考える¹¹。造立された歴史的背景まで明らかにすることはできないが、当該期は在地の石塔生産が活発でなかった時期でもあり、他産地に石塔を求めたのではないかと推測される。

II 在地産の宝篋印塔

1. 既往の研究

石見銀山遺跡では16世紀後半、元龜・天正年間から白色凝灰岩を使用する「定型化」した組合せ宝篋印塔が見られるようになる。最古の紀年銘を有するのが、龍昌寺跡塔の元龜3年（1572）銘の基礎である（鳥根県・大田市2002）。定型化以前の様相については、縦連子と反花座、格狭間の表現に着目した以下の研究がある¹²。鳥谷芳雄は大森地区にある大森塔を「定型化した初期型式」とし、元龜3年よりも古い16世紀中頃に位置づけている（鳥谷2002）。また今岡利江は円城寺石塔群について「定型外もしくは定型が確立される過渡期の製品」とする（今岡2004）。西尾克己・東山真治は物部神社塔（大田市川合町）と真淨寺塔（同大田町）、久利町松代塔の3基について、個体差があり同一系譜と捉えるかは課題としつつ、縦連子と反花座の蓮弁の特徴から「石

見銀山の宝篋印塔の祖型」の可能性を指摘している（西尾・東山2016）。

今回の調査であらたに、縦連子と蓮弁表現に共通性のある資料を確認したので報告するとともに、石見銀山遺跡の定型化した組合せ宝篋印塔への変遷について若干の考察を加えたい。

2. 久利町市の上の宝篋印塔

(1) 位置と現状（第5図、写真15）

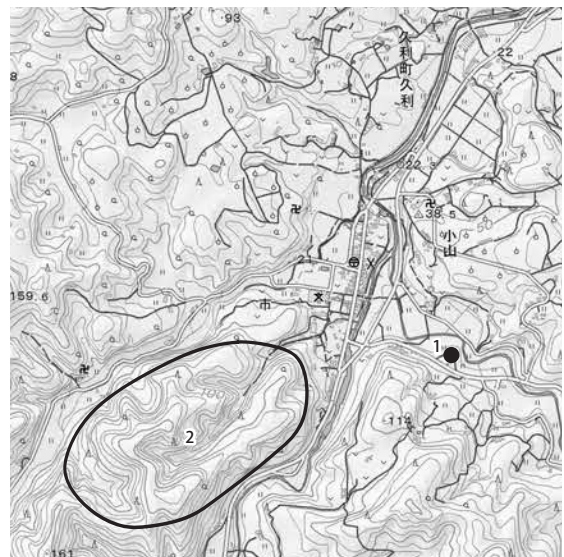
大田市久利町に所在する。この一帯は、戦国時代末まで久利氏が領有しており、石見銀山をめぐる大内・尼子両氏の争奪戦の舞台となった。久利氏の居館跡推定地や市城跡、城山城跡などの山城が分布している（山根2017）。

宝篋印塔は、石見銀山のある大森から南に流下する銀山川が、南東から流れてくる戸倉川と合流する地点の東に位置する。地藏堂に向かって左側に屋根と相輪、種別不明の部材1点が置かれている。地藏堂の背後は小さな残丘となり、その背後には旧道が通っている¹³。

(2) 宝篋印塔の概要（第6図、写真16・17）

相輪と屋根があり、塔身と基礎はみられない。使用されている石材は砂岩である。

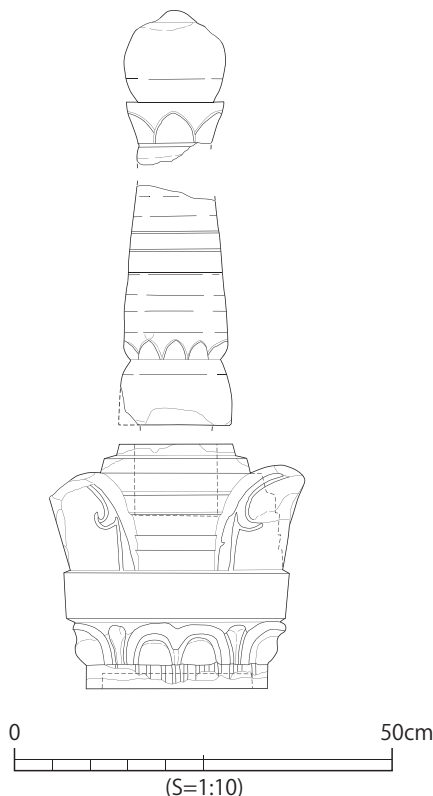
相輪は九輪の先端あたりで上下に折れ、ほども欠



第5図 久利町市の上塔・市城跡 位置図
①市の上塔 ②市城跡

いている。九輪部は風化が進んでいる。上下の破片を合わせた高さは51.7cmになる。宝珠は高さ12.0cm、最大径13.5cmで、丸みをおびる。請花は、高さ5.5cm、最大径12.8cm。おおきな単弁を5葉めぐらしている。九輪部の径は先端に向けて遞減する。輪は幅0.3cmほどの浅い溝で区画する。請花は最大径14.0cmあり、幅3.0cm、高さ2.5cmの小さな単弁をめぐらしている。伏鉢は高さ8.5cm、最大径は14.8cmである。

屋根は高さ32.3cm、上面幅15.2cm、軒上幅30.1cm、下面幅24.4cmである。上7段の段形を作る。1段目から6段目は高さ2.1~2.7cmあり、7段目は低く1.5cmである。軒の厚さは6.0cmで、段形にくらべて厚い。軒口は斜めになる。隅飾突起は単孤で外反する。基部幅が9.0cm、高さ13.5cmである。図左の隅飾突起は先端を欠失し、先端間の幅は現状で34.3cmある。側面には内弧に沿って、幅0.5cmの細い線彫りで弧状の線を刻む。弧状の線は軒3段目のあたりで、鉤形に曲がっている¹⁴。軒下には高さ5.7cm、幅27.1cmの蓮弁を表現する。中央と隅に覆輪付き複弁を配し、あいだに単弁をはさんでいる。その下の段形は高さ



第6図 久利町市の上塔実測図

3.0cmで、側面に幅0.5cm、深さ0.3cmほどの縦方向の溝を11本以上刻む。下面は縁を4.0cm残して、深さ2.0cm彫り込んでいる。

3. 宅野城跡北麓の宝篋印塔

(1) 位置と現状 (写真18)

大田市宅野町に所在する。この地域は、中世に宅野別符が成立し、戦国時代以降は宅野村ともいわれた。戦国時代までは益田氏の領地で、庶流である宅野氏が所領していたと推測されている。永禄5年(1562)以降は毛利氏の領地となっている。

石造物群は、北前船の寄港地でもあった宅野港から南東にむけて広がる平野の最奥部に位置する¹⁵。石塔群の南には、宅野氏の拠城と伝わる宅野城跡がある。石造物は、コンクリートブロック積み基壇のうえに南面して祀られた祠の背後に集積されている。内訳は組合せ宝篋印塔の部材7点と不明1点である。石材はすべて白色凝灰岩が使用されている。祠に向かって三列(組)並べられている。右を⑧③④、中央を①②、左を⑤⑥⑦⑨とした。今回は実測調査を行っていないため、概要のみを記述する。

(2) 概要 (写真19~22)

①宝篋印塔屋根

軒上の段形3段目から上位を欠失する。四隅の隅飾突起は1カ所のみ残存している。高さは20.0cm以上、軒の幅27.5cm、下面幅21.3cmである。上面に径6.6~7.2cmの円形のほぞ穴をもつ。段形は軒上が3段以上、下は2段である。段形の高さは2.2~2.5cm。軒は厚く8.5cmある。隅飾突起は単孤で、高さは7.0cm以上ある。側面は無地である。

②宝篋印塔基礎

高さ26.5cm、上面幅19.5cm、側面高19.6cm、側面幅30.0cmである。上端は反花座とし、上に縦方向の溝を刻む。反花座は中央に覆輪付き複弁、隅に覆輪付き単弁を配し間弁をはさむ。縦方向の溝は12本ある。溝は薬研彫りしてあり、幅1.0cm、高さ2.5cm、深さ0.6cmである。側面は四面とも幅0.8cm、深さ0.5cmの溝で、幅24.5cm、高さ13.8cmの輪郭を巻く。

③宝篋印塔塔身

幅15.0cm、高さ10.4cmである。上下面とも平坦である。四面には、金剛界四仏種子を側面いっぱいを使って刻んである。

④宝篋印塔相輪

九輪の途中から下位を欠失する。残存高は24.5cm。宝珠は径10.9cmで下位に重心がある。先端に径3.2cmの突起をもつ。上請花は径13.0cm、高さ6.0cm。蓮弁表現はなく無地である。九輪は浅い線刻により区画する。

⑤宝篋印塔基礎

上面を欠失している。高さは25.4cm以上、上面幅18.8cmである。側面の高さは19.6cm、幅28.0cmで、上端は反花座とする。反花座は中央に覆輪付き複弁、隅に覆輪付き単弁を配し間弁をはさむ。②とは違い縦方向の溝はない。側面は四面とも幅0.8cm、深さ0.5cmの溝で、幅24.0cm、深さ12.8cmの輪郭を巻く。

⑥宝篋印塔塔身

上下面とも一部を欠失している。高さ14.5cm以上、幅は18.0cmである。四面には金剛界四仏種子を、側面いっぱいを使って刻んである。

⑦宝篋印塔屋根

高さ16.5cm、軒幅27.0cm、下面幅20.5cm。段形は軒上に4段、下に1段を作る。軒下の段形には縦方向の溝を刻んでいる。上段形の高さは、1～3段目が2.0cm前後で、4段目が2.6cmある。軒と隅飾突起は幅0.8cm、深さ0.5cmの溝で区画する。隅飾突起は単弧で高さ6.0cm、幅8.2cmである。側面の文様は市の上塔と同じで、内弧に沿った線の中央が鉤形に曲がっている。下段形は高さ3.0cmで、側面には縦方向の溝を13本刻む。溝は幅1.0cm、深さ0.5cmあり、軒下から下面までつながっている。

⑧不明

宝篋印塔相輪か五輪塔空風輪の可能性もある。ほぞを欠失する。高さ21.5cm以上、宝珠(空輪)径11.2cm、請花(風輪)下面の径は11.5cmである。

⑨宝篋印塔屋根

屋根の残欠である。残存する高さは12.0cm、幅13.3cmである。段形は上3段以上、下1段である。

軒は厚さ5.3cmある。隅飾突起は内弧の一部がこの高さ5.1cm以上である。下段形は高さ2.4cmで、側面は無地である。

(3) 部材の組合せ

縦方向の溝を有する屋根①と基礎⑤、溝のない屋根⑦と基礎②がそれぞれ組み合わせるものと復元できる。この2組のどちらかに塔身⑥が組み合わせる。塔身③は2組と法量が合わないで、別の部材と考えられる。

4. 宝篋印塔の特徴と年代的位置づけ

(第7図、表3～4、写真23～27)

市の上塔と宅野城跡北麓の石塔(以下、宅野塔)の屋根・基礎について、龍昌寺跡塔、大森塔、松林寺遺跡2区出土品(島根県2019第79図203。以下、松林寺塔)、真浄寺塔と形態的特徴を比較する¹⁶。

(1) 屋根

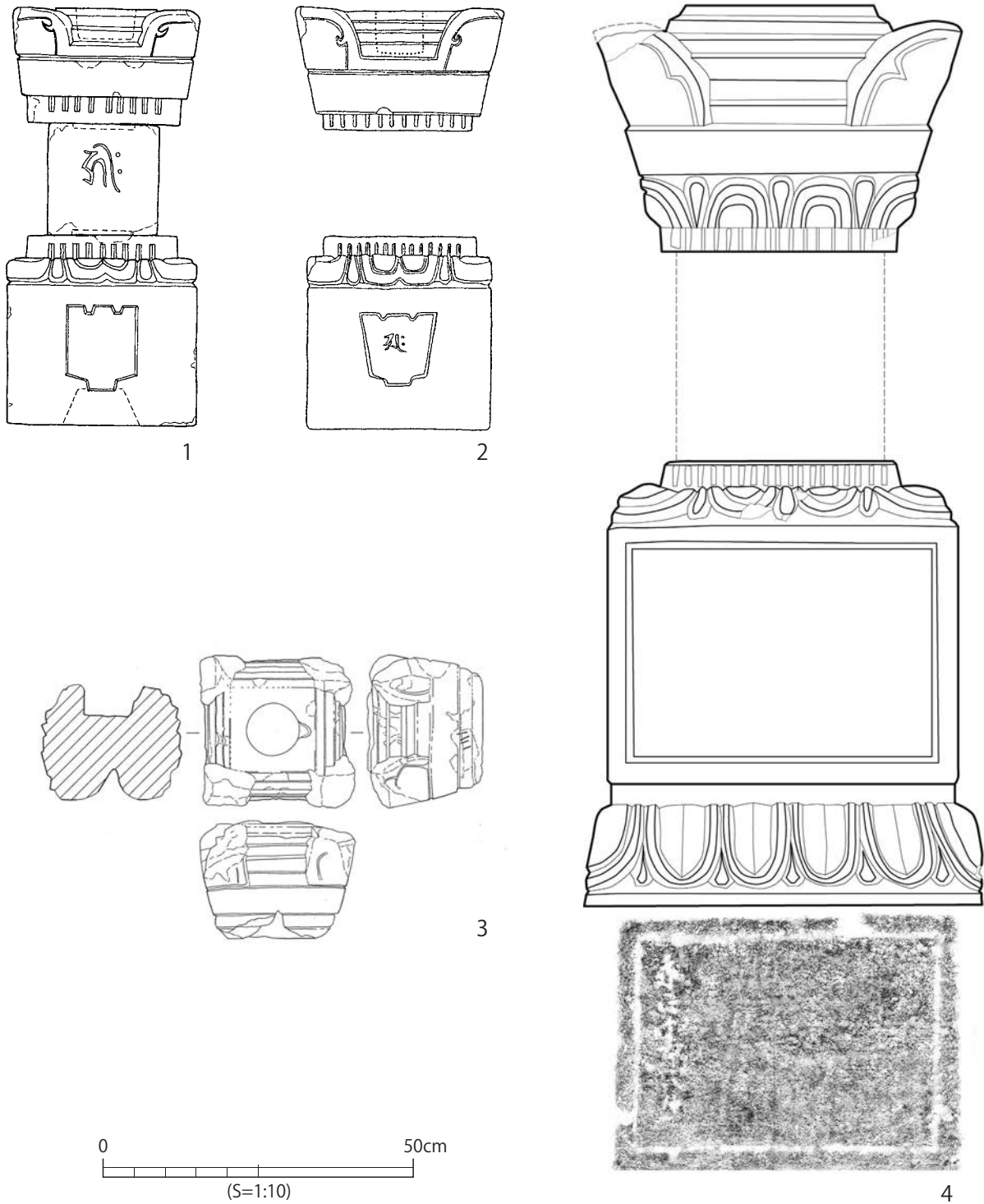
特徴 段形の数と装飾表現に差異がみられる。上段形は3段から7段、下段形は1段と2段がある。下段形は、無地のもの(宅野塔①、松林寺塔)と装飾表現がみられるものに大別される。装飾表現には、請花と縦方向の溝を表現するもの(市の上塔、真浄寺塔)と、縦方向の溝を刻むもの(宅野塔⑦、大森塔、龍昌寺跡塔)がある。

上段形と隅飾突起の彫出表現をみると、別々に彫出するもの(市の上塔、宅野塔①・⑦、松林寺塔、真浄寺塔)と、それぞれを一体で作り出すもの(大森塔と龍昌寺跡塔)がある。松林寺塔・宅野塔⑦・大森塔・龍昌寺跡塔のように、軒と隅飾突起のあいだを溝で区画した簡略なものもみられる。

隅飾面の文様は、松林寺塔と宅野塔①を除き、内弧に沿った線が中ほどで鉤形に曲がっている。松林寺塔は内弧に沿って二弧(連続する弧)の線を刻み¹⁷、宅野塔①は無地である。

変遷 軒と上段形、隅飾の彫出方法、隅飾面の文様に着目する。

軒・軒上段形・隅飾突起を別々に彫出するものから、軒と隅飾突起を溝で区画し、上段形は別に彫出するもの、軒と隅飾突起を溝で区画し、隅飾突起と上段形と一体で作り出すものへ変化したと



第7図 関連石塔実測図
 1 大森塔（鳥谷2002） 2 龍昌寺跡塔屋根・基礎：元龜3年銘（島根県・大田市2002）
 3 松林寺塔（島根県2019） 4 真浄寺塔（西尾・東山2016）

考えられる。

既往の研究から隅飾突起は、おおまかに二孤から単孤へ、側面は輪郭巻から輪郭を省略し内弧のみを片切彫り・線彫りしたものへ変化していくと

考えている。内孤に沿って二孤を線彫りするものから、鉤形に曲がる文様へ変遷したと考えられる。

(2) 基礎

特徴 いずれも反花座で、宅野塔⑤以外は、すべて

上段形に縦方向の溝を刻む。反花座の蓮弁は、真浄寺塔以外は同じ配置だが、その表現が異なっている。宅野塔②・⑤は丸みのある曲線で立体的に刻出している。ほかは直線的で浅い扁平な作りで、中央の複弁を分画する区画線も最後まで伸びていない。後者はより退化した形態といえる。側面は宅野塔②・⑤が枠線しかなく、大森塔・龍昌寺塔には独特な格狭間が表現されている。

変遷 文様表現と蓮弁の彫成方法に着目する。縦方向の溝がなく蓮弁は立体的表現をしたものから、縦方向の溝を有し、蓮弁を立体的に表現したものへ、そして縦方向の溝を有し、蓮弁の彫りが浅く扁平なものへ変遷したと考えられる。側面も輪郭のみのものから、あらたに直線的で独特な形態をした格狭間が意匠化される。

(3) 宝篋印塔の変遷

屋根の変遷から、以下の古～新段階を設定する。

古段階 屋根の軒・段形・隅飾突起を別々に造作し、縦方向の溝がないものを当該期とした。白色凝灰岩製の宅野塔①で構成される。

基礎は宅野塔①に組み合う⑤が当該期に位置づけられる。反花座は立体的で縦方向の溝がなく、側面は輪郭のみである。

中段階 隅飾突起と上段形は別々に造作するが、古段階よりも簡略化・装飾化したものを当該期とした。白色凝灰岩製の宅野塔⑦・松林寺塔と砂岩製の市の上塔・真浄寺塔で構成される。隅飾突起と軒は市の上塔と真浄寺塔が別作り、宅野塔⑦と松林寺塔は溝で分割する簡略な作りである。隅飾面の表現は、真浄寺塔と松林寺塔は内弧に沿った二弧の線を刻み、市の上塔と宅野塔⑦は「鉤形」文様である。軒下段形は、市の上塔と真浄寺塔は上段を請花、下段を縦方向の溝で飾る。宅野塔⑦は1段で側面に縦方向の溝を刻み、松林寺塔は2段で側面が無地である。基礎は宅野塔⑦と組み合う②が該当する。立体的な反花座を縦方向の溝で飾り、側面は輪郭のみである。縦方向の溝は、屋根・基礎とも側面の上端から下端まで貫通している。

新段階 隅飾突起と上段形は一体で造作し、隅飾面

の文様は「鉤形」、軒下に「縦方向の溝」を刻むものを当該期とした。白色凝灰岩製の大森塔・龍昌寺塔で構成される。

基礎は大森塔と龍昌寺塔が当該期に相当する。側面に独特な格狭間が出現するのが、大きな特徴である。反花座の構成は中期と同じだが、直線的で扁平な彫りに変化する。縦方向の溝は中期と異なり、貫通せず途中から刻まれている。定型化した組合せ宝篋印塔が確立した段階と位置付けられる。

紀年銘を有するものに、真浄寺塔と龍昌寺塔がある。前者は「永正十□□八月」(1513~1517) 銘、後者が元亀3年(1572) 銘である。この紀年銘は、属性の前後関係とも矛盾しない。大づかみに、古段階は16世紀前半、中段階は16世紀中頃、新段階は16世紀後半としておきたい。

新段階はおおきな画期として捉えられる。屋根段形と隅飾の一体化、直線的で扁平な反花座への変化は大量生産のためと考えられる。その背景には石見銀山における需要の高まりがあったと想定される¹⁸。こうした生産の増大に対応できたのは、古・中段階にかけて、在地における石工集団の活動が活発化していたためであったと考えられる。中段階に出現した縦方向の溝と鉤形文様、そして新段階の特徴である独特な格狭間の意匠は、創造性豊かな石工集団の存在を伺わせるものである。

おわりに

本稿では、石見銀山遺跡の周辺で新たに確認された搬入品と在地品について報告し、若干の考察を試みた。既往の研究では、石見銀山遺跡の定型化した宝篋印塔の相輪・屋根の意匠について、周辺地域に類例を求めることができないとされていた(守岡2011)。しかし、周辺地域での調査の進展により、在地品のなかで定型化への変遷過程を見通せるようになったことは、大きな成果といえる。

今回は限られた資料のみを対象として取り上げたため、搬入品の影響を含めて精緻な分析がおこなえていない。あらためて詳細な検討を加えたいと考えている。

石見銀山遺跡の緩衝地帯を含めた周辺地域の石造物調査はほとんど手付かずといつてよい。今後も継続して周辺地域の調査に取り組む必要があることを、あらためて記しておきたい。

謝辞

令和4年7月9日、三瓶小豆原埋没林公園で開催された「月イチガク④墓場放浪記～石塔から探る石見の歴史」の報告を終えた帰路、瑞応寺前塔を発見したことが執筆にいたった切っ掛けである。報告の機会をいただいた中村唯史氏に心より感謝申し上げます。また現地調査及び本稿の作成にあたっては下記の方からご高配を賜った。明記して感謝申し上げます。

円城寺 瑞応寺 島根県埋蔵文化財調査センター
石橋悦雄 大國晴雄 坂根孝義 佐藤亜聖
須藤光行 常松育夫 松田義光 松浦義彦
宮本正保 目次謙一 森山 護 森山賢勝
山下英治

¹ このほかにも、温泉津町内において花崗岩製五輪塔火輪や日引石製の小型板碑（石仏）が確認されている（間野2023）。

² 県内の石造物を概観した既往の研究では、円城寺の花崗岩製宝篋印塔が、完全な組み合わせで残っていないためか、取り上げられていない（今岡2013）。

³ 既往の研究では、大田市教育委員会によってはじめて実測図が紹介されている（島根県大田市1990）。その後、今岡稔と今岡利江がすべての石造物を調査・報告している（今岡2004、今岡・今岡2004）。

⁴ 石造物群は、平成30年4月9日、大田市東部を震源として発生した震度5強の地震により被災し、復元された。今岡稔と今岡利江が2004年に行った調査時とは、組み合わせが変わっている。

⁵ この地域の石造物は、十王堂のなかに安置された奪衣婆像が知られていた（原1984）。十王堂は平成31年4月に解体され、石造物は円城寺に移された。現在、同寺の境内にある山王権現社に奪衣婆像と十王像3体、別の堂内に十王像7体と阿弥陀と地藏仏2軀が安置されている（写真28・29）。

⁶ 矢筈山城については、城主が富永兵庫守、山麓にある「殿屋敷」は城主の屋敷跡、その付近にある「五輪塔」は城主の

墓と伝えられている（簸川郡山口村役場「村誌」）。富永氏は尼子氏の家臣で、のちに毛利氏に降つたとされる。矢筈山城と同じ国境の城、山中要害山城（大田市富山町）の城主としても伝えられる（高屋2017）。

⁷ 古殿大明神は八百萬大神を祭神とする。享保13年の創建で、現在の社殿は昭和62年（1987）に再建された（昭和62年3月28日記「古殿大明神御社由緒」）。

⁸ 瑞応寺の創建以前に「瑞応山」の「寺屋敷」と呼ばれる場所に真言宗寺院があり、移転に際して曹洞宗に改宗したのではないかと伝えられる（簸川郡山口村役場「村誌」）。

寺屋敷については、瑞応寺の森山賢勝御住職から以下のとおり御教示をいただいた。現在地から北西の丘陵上に、寺跡らしき遺構（石垣・井戸）がみられる（第3図A）。この場所を「寺屋敷」とは呼んでいない。寺は山崩れにより、いったんは同じ丘陵の南端、屋号「寺脇」と呼ばれる場所（第3図B）に移り、そのうち現在地に移転した。

⁹ 県道56号大田佐田線の工事の際、現在地に後退させているとのことである（大國晴雄氏のご教示による）。

¹⁰ 福谷隼人氏は文久3年に亡くなっている（大國晴雄氏のご教示による）。また野井神社先代宮司、朝倉久善氏が記録した山口八幡宮の文政4年（1824）と嘉永7年（1860）の棟札写に「福谷隼人」の名前がみられる。なお朝倉氏が記録した大田市内の棟札等の資料は、朝倉由貴子宮司のご厚意により写真撮影をさせていただいた。

¹¹ 花崗岩製品は邑南町でも確認されている（今岡2013）。江の川支流八戸川の最上流部に位置する高畑石塔（邑南町市木）は、報告した3塔と同型・同大の宝篋印塔とみられる（松本1991）。

¹² 石見銀山遺跡の総合整備計画策定にあたって、石造物の考古学的調査がはじめて行われた。このとき調査を担当した蓮岡法暲は、天正・慶長期の一石五輪塔・組合せ宝篋印塔、無縫塔の「基礎上部の反花座とその上の塔身を受ける方形台状の段の彫刻には極めて特徴的な様式」があるとし、「この地方のこの主の石造物の重要なポイントになる」ことをすでに指摘している（蓮岡1987）。

¹³ 久利町2009年には、昭和14年（1939）頃の道路改修工事に伴い、小さな丘を切り崩したところ、頭だけの骨が出てきた、武士の頭だけを持ってきて埋めたのではないかと記されている。

¹⁴ この文様について、宮本徳昭は「中央に外側に突起がある」（宮本1999）、池上悟は「内側中央が小さく巻き上がる」（池上2002）、守岡正司は「外側に向かって小さく鍵状に巻き上がる」（守岡2004）と表現している。

¹⁵ 平成25年6月10日、田中義昭氏と池上悟氏による石造物調査指導会で指導いただいた。

¹⁶ 円城寺石塔群および旧邇摩郡所在の石塔との属性比較はあ

らためて行いたい。

¹⁷ 報告書（第7図3 右面の左側）では、下孤の線が上孤との接点より左に伸びているが、実見したところ、接点から左は剥落によるものであった。

¹⁸ 西尾・東山は需要の増大に伴い使用石材もデイスイト・砂岩・凝灰岩から軟質の福光石・白色凝灰岩に変化したとする（西尾・東山2016）。

【参考文献】

池上悟2002「特徴的墓塔の様相」『石見銀山遺跡石造物調査報告書2 龍昌寺跡』鳥根県教育委員会・大田市教育委員会
石橋悦雄2009『旧山口村郷土の歴史』
今岡利江2004「鳥根県の情報」『日引第5号』石造物研究会
今岡稔2013「鳥根県の石造物と益田の御影石製石造物」『御影石と中世の流通－石材識別と石造物の形態・分布－』高志書院
今岡稔・今岡利江2004「山陰の石塔二三について－11－」『鳥根考古学会誌第20・21集合併号』鳥根考古学会
今岡利江・今岡稔2011「山陰の石塔二三について－17－」『鳥根考古学会誌第28集』鳥根考古学会
川島武良・佐々木敬志2004「写真集 一畑薬師灯籠を訪ねて（その2）」『古代文化研究No12』鳥根県古代文化センター
久利町老人クラブ寿会2009「地藏さんと武士の墓について」『郷土誌ふるさと久利』
坂根兵部之輔1967（2004再版）『靈椿山円城寺』靈椿山円城寺
佐藤重聖2016「石塔の定型化と展開」『十四世紀の歴史学－新たな時代への起点－』高志書院
佐藤利江2020「山陰の石造物概観と倉吉古石塔の編年について」『中世石造物の成立と展開』高志書院
鳥根県大田市教育委員会1984『大田市埋蔵文化財調査報告4 三瓶川流域遺跡他詳細分布調査Ⅱ－大田市内遺跡一覧・地図－』
鳥根県大田市教育委員会1989『大田市文化財調査報告第1集 野城の民俗－鳥根県大田市－ 三瓶川総合開発事業に伴う文化財調査報告1－』
鳥根県大田市教育委員会1990「円城寺関連石造物群」『大田市埋蔵文化財調査報告書11 久谷たたら跡－三瓶川総合開発事業に伴う埋蔵文化財調査2－』
鳥根県教育委員会・大田市教育委員会2002『石見銀山遺跡石造物調査報告書2 龍昌寺跡』
鳥根県教育委員会・大田市教育委員会2010『石見銀山遺跡石造物調査報告書10 金剛院墓地・本谷周辺・中小路の石造物』
鳥根県教育委員会・大田市教育委員会2021『石見銀山遺跡石造物調査報告書20－保国山金皇寺（仁摩町大國）－』

鳥根県教育委員会2017『高原遺跡（3区）・中尾H遺跡（4区）・門遺跡（2区）』

鳥根県教育委員会2019『垂水遺跡 松林寺遺跡 庵寺石塔群』
鳥根県佐田町教育委員会1988『佐田町の遺跡 窪田地区』

鳥谷芳雄2002「大森地区の一石五輪塔・組合せ宝篋印塔」『石見銀山遺跡調査ノート1』鳥根県教育委員会・大田市教育委員会・温泉津町教育委員会・仁摩町教育委員会
鳥谷芳雄2008「温泉津金剛院の宝篋印塔基礎について」『石見銀山遺跡調査ノート7』鳥根県教育委員会・大田市教育委員会

西尾克己・東山信治2016「大田市内の中世石造物」『世界遺産石見銀山遺跡の調査研究6』鳥根県教育委員会・大田市教育委員会

蓮岡法暉1987「紀年銘のある石造物について」『石見銀山遺跡総合整備計画策定報告書』鳥根県教育委員会・鳥根県文化財愛護協会

原 宏一1984「奪衣婆像」『野の石－山陰の石仏めぐり－』

松本岩雄1991「位置と環境」『中国横断自動車道広島浜田線建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ』鳥根県教育委員会

間野大丞・伊藤徳広2022a「テーマ別調査研究「港町温泉津の景観と変遷」における石造物調査－中間報告－」『世界遺産石見銀山遺跡の調査研究12』鳥根県教育委員会・大田市教育委員会

間野大丞・伊藤徳広2022b「保国山金皇寺石造物調査報告（補遺）」『世界遺産石見銀山遺跡の調査研究12』鳥根県教育委員会・大田市教育委員会

間野大丞2023「中世石造物からみた温泉津」『石見銀山遺跡テーマ別調査研究報告書5 港町温泉津の景観と変遷』鳥根県教育委員会・大田市教育委員会

宮本徳昭1999「石造物調査報告書 第2章 石造物群の概要と特徴」『石見銀山遺跡総合調査報告書第3冊 城跡調査・石造物調査・間歩調査編』鳥根県教育委員会・大田市教育委員会・温泉津町教育委員会・仁摩町教育委員会

三谷晃1977『大田碑石散歩』

守岡正司2004「鳥根県簸川郡多伎町所在の石塔」『来待ストーン研究5』モニュメント・ミュージアム来待ストーン

守岡正司2011「石見銀山遺跡石造物の概要」『石見銀山遺跡テーマ別調査研究報告書1』鳥根県教育委員会・大田市教育委員会

山根正明2017「市城跡」『石見の山城』高屋茂男編 ハーベスト出版

有限会社平凡社地方資料センター 1995『日本歴史地名体系第33巻 鳥根県の地名』平凡社

表1 円城寺宝篋印塔一覧

番号	相輪	屋根	塔身	基礎	基壇	今岡2004の挿図番号
1	デイサイト (気泡多い)	デイサイト (三瓶か大江高山)	砂岩	砂岩	砂岩	第7図5
2	砂岩	凝灰岩	デイサイト (細かい)	砂岩	砂岩か凝灰岩	第7図4
3	花崗岩 (山陽)	花崗岩 (山陽)	凝灰岩	凝灰岩	デイサイト	相輪・屋根：第8図7 塔身・基礎：第6図3 基壇：第8図7
4	安山岩 (日引石)	安山岩 (日引石)	安山岩 (日引石)	安山岩 (日引石)	砂岩	第6図2
5	砂岩	凝灰岩	砂岩	デイサイト (細かい)	凝灰岩	第5図1
6	デイサイト (細かい)	デイサイト (細かい)	安山岩 (日引石)	デイサイト (細かい)	デイサイト (細かい)	相輪・屋根：第8図6 塔身・基礎：第8図7 基壇：第6図3
7	砂岩	デイサイト (気泡多い)	砂岩	砂岩	デイサイト (気泡多い)	相輪・屋根：第6図3 塔身・基礎 基壇：第8図6
8	凝灰岩	-	-	-	-	第6図3

表2 円城寺宝篋印塔 石材・部位別数量

石材	相輪	屋根	塔身	基礎	基壇
凝灰岩	1	2	1	2	1 + 1 ?
砂岩	3		3	2	2 + 1 ?
デイサイト(大江高山・三瓶)	0	1	0		0
デイサイト(そのほか)	2	2	1	2	3
安山岩(日引)	1	1	2	1	0
花崗岩	1	1			

表3 組合せ宝篋印塔屋根の属性一覧

名称	石材	上段形の数	軒	隅飾突起			側面文様	下段形		段階
				軒との取り付け	外形	段形との取り付け		段数	側面	
久利町市の上塔	砂岩	7	あつい	別作り	単孤	別作り	内弧に沿った線。中ほどで鉤形に曲がる	2	請花・縦方向の溝	中
宅野城跡北①	白色凝灰岩	(3)	あつい	別作り	単孤	別作り	なし	2	無地	古
宅野城跡北⑦	白色凝灰岩	4	あつい	溝で区画	単孤	別作り	内弧に沿った線。中ほどで鉤形に曲がる	1	縦方向の溝	中
大森塔	白色凝灰岩	4	あつい	溝で区画	単孤	一体	内弧に沿った線。中ほどで鉤形に曲がる	1	縦方向の溝	新
龍昌寺跡 (第22図162)	白色凝灰岩	5	あつい	溝で区画	単孤	一体	内弧に沿った線。中ほどで鉤形に曲がる	1	縦方向の溝	新
松林寺遺跡 (第79図303)	白色凝灰岩	6	あつい	溝で区画	単孤	別作り	内弧に沿った二孤の線	2	無地	中
真浄寺塔	砂岩	7	あつい	別作り	単孤	別作り	内弧に沿った線	2	請花・縦方向の溝	中

表4 組合せ宝篋印塔基礎の属性一覧

名称	石材	反花座			側面	段階	備考
		上端	彫出	蓮弁配置			
宅野城跡②	白色凝灰岩	縦方向の溝	曲線的。深い	中央に覆輪付き複弁、隅に覆輪付き単弁。間弁をはさむ	枠線のみ	中	
宅野城跡⑤	白色凝灰岩	無地	曲線的。深い	中央に覆輪付き複弁、隅に覆輪付き単弁。間弁をはさむ	枠線のみ	古	
大森塔	白色凝灰岩	縦方向の溝	直線的。浅い	中央に覆輪付き複弁、隅に覆輪付き単弁。間弁をはさむ	格狭間のみ	新	
龍昌寺跡 (第22図164)	白色凝灰岩	縦方向の溝	直線的。浅い	中央に覆輪付き複弁、隅に覆輪付き単弁。間弁をはさむ	格狭間のみ	新	元亀3年(1572)銘
真浄寺塔	砂岩	縦方向の溝	曲線的。深い	中央に間弁。左右と隅の覆輪付き単弁に間弁をはさむ	枠線のみ	中	「永正十□□八月」 (1513~1517)銘



写真1 霊椿山円城寺の石造物群



写真2 円城寺1号塔



写真3 円城寺2号塔



写真4 円城寺3号塔



写真5 円城寺4号塔



写真6 円城寺5号塔



写真7 円城寺6号塔



写真8 円城寺7号塔



写真9 円城寺3号塔の相輪・屋根



写真10 古殿大明神と殿屋敷遺跡の宝篋印塔



写真11 殿屋敷遺跡の宝篋印塔



写真12 瑞応寺前の石造物群



写真13 瑞応寺前の宝篋印塔（正面）



写真14 瑞応寺前の宝篋印塔（斜め上から）



写真15 久利町市の上 地藏堂と宝篋印塔



写真16 久利町市の上宝篋印塔屋根



写真17 久利町市の上宝篋印塔相輪



写真18 宅野城跡北麓の石造物群



写真19 宅野城跡北麓の石造物 上から①②



写真20 宅野城跡北麓の石造物群 上から⑨⑦⑥⑤



写真21 宅野城跡北麓の石造物群②



写真22 宅野城跡北麓の石造物群④



写真23 宅野城跡⑦隅飾突起



写真24 市の上塔 隅飾突起



写真25 真浄寺宝篋印塔の屋根（正面）



写真26 真浄寺宝篋印塔の屋根（斜め下から）



写真27 龍昌寺跡元亀3年銘宝篋印塔（基礎）
（大田市教育委員会所蔵）



写真28 旧山口町十王堂の石造物
（手前が奪衣婆像）



写真29 旧山口町十王堂の石造物

旧大森代官所表門・門長屋を撮影した新出の古写真について

倉恒 康一

はじめに

近世の石見銀山御料の支配拠点であった大森代官所で現存する唯一の建物である表門・門長屋（表門を挟んで北側を北門長屋、南側を南門長屋という）は、現在は石見銀山資料館（いも代官ミュージアム）の一部となり石見銀山を象徴する景観の一つとして親しまれている。今回、明治初期にこの表門・門長屋を撮影したと推定できる写真を確認したので報告する。

1 旧大森代官所表門・門長屋

(1) 旧大森代官所敷地の土地利用の変遷

本論に入る前に、現在、石見銀山資料館が建つ敷地の利用の変遷を振り返りたい。

この場所に代官所が設置されたのは寛永年間（1624-43）とされているが、現存する表門・門長屋は代官所設立当初からの建築物ではない。表門は寛政12年（1800）3月24日の大火でも類焼を免れたとの記録が残っているので同年以前の建設、北門長屋は文化12年（1815）8月27日に上棟されたと棟札にあるので同年の建設と考えられている（表門と北門長屋は材質・工法が同じであるため、文化12年に表門も再建された可能性がある¹）。

慶応2年（1866）7月20日に、幕長戦争での幕府軍の不利を悟った代官鍋田三郎右衛門が退去して代官所としての機能を終える。その後進軍してきた長州藩軍は旧代官所建物を本陣として使用し、慶応4年（1868）閏4月からは旧銀山御料を管轄する大森宰判の代官所となった。明治2年（1869）10月には新設の大森県の県庁が置かれたが、翌3年に県庁は浜田に移転し、代わりに旧代官所建物には大森支庁が入った。明治5年（1872）1月には支庁から郡役所へ、同7年（1874）には第三大区役所となった（第三大区役所については後述²）。

この間の明治6年（1873）には旧代官所建物のうち稽古場（石見銀山資料館の南側に隣接する中村ブレイスの敷地に所在）が大森小学校の校舎に転用された³。

敷地内の様子に大きな変化があったのは明治12年（1879）である。この年に表門・門長屋を残して旧代官所建物は解体され、その古材を再利用して稽古場跡地に二階建ての大森小学校の校舎が建設されたという。明治26年（1893）10月の水害で被災するまでこの校舎は使用された⁴。稽古場跡以外の敷地には、第三大区役所を引き継いだ邇摩・安濃郡役所（明治29年に安濃郡役所を分離⁵）が設置されたようである⁶。

明治26年水害で小学校は移転するが、郡役所がどうなったかは不明である。ただ同35年（1902）3月8日に邇摩郡役所が新築され、この建物が現在は石見銀山資料館として利用されている。従って、この時に現在とほぼ同じ景観が出現したことになる。

大正15年（1926）7月1日に郡役所が廃止⁷されて以降は、旧郡役所建物は青年学校・裁縫女学校・大森保育園に転用された。なお門長屋は邇摩郡の土木管区が倉庫として利用した後、昭和20年（1945）頃にはバス待合所になっていたという。そして、昭和51年（1976）8月1日に石見銀山資料館となり現在に至っている⁸。

(2) 表門・門長屋の修復

旧代官所建物の中で唯一現存する表門・門長屋だが、建設後に複数回改修されている。明治初期には天井が張られ、大正7-8年（1918-19）には、表門の屋根葺き替え・門長屋の建て替え・南門長屋に物置増築という大改造が施された。昭和期にも壁を窓に変えた他、建具や造作に改変が及んだ。

このため建設当初の姿に復元するため、まず昭和44年度（1969）に半解体修理され、平成3-4年

度（1991-92）にも再度修復が図られた。これ以外に、南北の門長屋に続く土塀の修復工事が施されている⁹。

（3）近世の表門・門長屋の姿

残念ながら、表門・門長屋の詳細を描いた近世の絵図面や絵画資料は確認されていない。ただし、当時の表門・門長屋の景観の復元材料となる資料は皆無ではない。

まず天保12年（1841）に作成された大森代官所の見取り図である「大森陣屋絵図」（石見銀山資料館所蔵）は、表門・門長屋に限らず大森代官所を構成する建物群の配置を明らかにしてくれる。これによると、北門長屋には「仮牢」「留り所」があり、「表御門」を挟んで南門長屋には「御門番所」「大工部屋」があった。それに続いて「無名異製法所」「御物見」「西御門」「稽古場」が並んでいたことがわかる¹⁰。ただし、見取り図であるためいずれの建物もその外観は不明である。

もう一点は、明治40年（1907）5月29日の皇太子（後の大正天皇）行啓を記念して発行された絵（写真）ハガキである（以下「行啓ハガキ」という）。石見銀山資料館のホームページ¹¹に掲載されたその画像によると、皇太子一行を歓迎するために飾り立てられた表門・門長屋を含む邇摩郡役所を高所から見下ろす構図で撮影している。戦前に表門・門長屋（邇摩郡役所）を撮影した写真は他にもあるが、本資料は撮影年次（明治40年）が確定できる点で貴重である。ただし、当然だが代官所の母屋をはじめ、「大森陣屋絵図」では南門長屋から南へ続く建物群（無名異製法所・御物見・西御門・稽古場）は解体されており確認できない。

2 新発見の古写真の年次比定

（1）古写真の概要

令和2年度（2020）、旧津和野藩主亀井茲常伯爵家旧蔵とされる古写真91枚が島根県立古代出雲歴史博物館の所蔵となった。これは、明治から昭和初期にかけてと推定される津和野・鹿野など亀井家ゆかりの土地の景観や、東京の亀井邸の様子等が撮影さ

れた写真から成るが、本稿で紹介したいのはその中の1枚で、右上隅に「石見国第三大区署」とのキャプション（墨書）付きの古写真【資料1】である。法量は縦17.0センチメートル、横24.0センチメートルで、水損によるものか向かって左側に写る山の部分が滲んでいる。

中央には旗のようなものが翻っているが、ブレており何かは不明である。

門を備えた瓦葺き・漆喰の壁の建物が石垣の上を画面左右に伸びる。門は二つあり、中央からやや右側の階段を伴う門が目立つが、向かって左端にもある。門をくぐった奥には山がある以外には殆ど不明だが、旗竿から向かって左側に、木の枝に隠れながらわずかだが切妻造の屋根が見える。向かって右の下部には木橋が架かっており、建物に並行して川が流れているのだろう。この橋の欄干に牛が紐で繋がれている。橋の右側、門の正面には掲示板のような構造物が見え、さらにその右には見切れているが家屋が写っている。

向かって右側の階段を伴う門付近には人物が見える。階段の上に4人（左端と右端の2人は洋装であり軍か警察の制服であろうか。残り2人は母親とそれに背負われた乳児のように見える）、階段の下には2人おり、うち1人は椅子を抱えている。6人は、いずれもカメラの方向に顔を向けているがポーズを構えている様子ではなく、また表情も判別できないので、彼らの為に撮影した写真ではないようだ。撮影目的は不明だが建物全景を撮影し、その場に居合わせた6人と牛1頭が写り込んだということだろう。

なお、撮影者の特定につながる書き込み・印字等は確認できなかった。

（2）「石見国第三大区署」に基づく年次比定

一見して旧大森代官所の表門・門長屋を銀山川の対岸から眺めた景観と酷似しているのが明らかである（参考までに現在の写真を【資料2】として掲げる）。ではいつの時点の写真なのであろうか。この問題を解く重要な鍵が「石見国第三大区署」というキャプションである。「大区」とは明治11年（1878）

7月22日に市町村制が施行されるまで存在した地方制度「大区・小区制」の大区を指すのであろうが、浜田県では明治6年（1873）5月7日に大区・小区制が施行され¹²、大森地区は「第三大区」に区分された。また翌7年（1874）4年13日に各大区に「大区役所」を同県は設置しており¹³、第三大区の役所は先述したとおり旧大森代官所に置かれたとされている。

このように一連の事実とキャプションの記述が符合する。従って、本古写真は明治7年4月に第三大区役所が設置されてから、大区・小区制が廃止される同11年7月までに撮影された可能性がある。

（３）被写体に基づく年次比定

ただし、第三大区役所が廃止された後の撮影であったにもかかわらず、キャプションに過去の組織名を使用した可能性も全くは否定できないので、続いては被写体から撮影年次を考察したい。なお本稿で注目する建物を注記加筆した写真を【資料3】として文末に掲げるので、参考にされたい。

まず、写真右隅に写る銀山川沿いの家屋に注目しよう。現在は石見銀山資料館の駐車場に相当する場所であり、明治40年の行啓ハガキでは既に空き地となっている。一方で、文政8年（1825）当時の大森地区の屋敷地割を復原した生田光晴氏の研究¹⁴によると同地には建物が存在していた。また、同論文109頁掲載の明治9年（1876）3月の日付が入っている「石見国迺摩郡佐摩村大森町市街屋敷番号図面」でも同地には番号が割り振られており、同年の時点では建物が存在していたと思われる。この銀山川沿いの土地にあった建物がいつ取り壊されたかは不明だが、少なくとも本写真の撮影時期が明治40年の行啓前に遡ることは確実である。

次に画面中央（牛の背の上方）から向かって左側、南門長屋に続く三つの建物に注目したい。

現在は大正時代に増設された南長屋門の物置や中村ブレイスの敷地となっているこの区域には、「大森陣屋絵図」によれば南門長屋から「無名異製法場」「御物見」「西御門」が続いている。改めて写真を確認すると、南門長屋から向かって左隣には用途

は不明だが切妻造の建物が一棟確認できる。その左隣には道路を通行する者を上から監視するかのように出窓が設けられており、それに続いて左端には門が見える。後二者は「御物見」と「西御門」に相当すると推定でき、「大森陣屋絵図」に示される建物と本写真で確認できる建物の配列と一致する。とすれば、本写真は代官所の主要建物が解体された明治12年以前に撮影されたのではなかろうか。

（４）小括

キャプション及び被写体の考察から、本古写真の撮影年次は、大区・小区制が敷かれていた明治7年から同11年までに撮影された可能性はかなり高いように思われる¹⁵。

3 古写真から読み取れること

（１）道路面の高さ

まず気付くのが、道路面が現在よりも相当低いことである。写真では石垣の上に表門と門長屋の建物があり、表門から道路面まで降りる階段が設置されているが、現在は道路面と表門は同一地平面であり石垣も階段も存在しない（埋められていると思われる¹⁶）。写真では表門付近に椅子を持つ人物の肩の背後まで石垣が積んであるように見えるので、高さ1メートル以上の石垣が存在したのだろう。

（２）門長屋の出窓の形状

南北の門長屋の出窓が復元工事を経た現状と異なっている。ただし、本写真の形状も建設当初のものとは断言できず、建築分野との専門家の見解が待たれる。

（３）無名異製法場

先述したとおり、南門長屋から向かって左側に「大森陣屋絵図」の「御物見」「西御門」に相当すると思われる建物が確認できた。とすれば南門長屋と「御物見」の間に見える建物は「大森陣屋絵図」に「無名異製法場」とある建物に当たる可能性が高い。近世の石見銀山の特産品の一つ「無名異」の製造工場の可能性が高い建物が写っている点は貴重な発見だろう。

(4) 門長屋の奥の建物

写真中央、門長屋の屋根越しわずかに切妻造の屋根が確認できる。本写真が明治7年から同11年の間に撮影されたのであれば、これは解体前の代官所母屋の屋根の一部の可能性がある。

おわりに

以上は建築学にも近代史にも門外漢である筆者の考察であるので、不十分な点、的外れな指摘も多々あるかと思う。読者諸氏の叱正を仰ぎたい。

なお、今回、島根県立古代出雲歴史博物館で調査した旧津和野藩主亀井茲常伯爵家旧蔵とされる古写真の中に、城上神社の拝殿を撮影したものも確認した。撮影時期を推定できる材料に乏しく、今回紹介した表門・門長屋の古写真とどのような関係にあるのか不明だが、参考までに掲げて擲筆する【資料4】。

(謝辞)

資料調査に当たっては島根県立古代出雲歴史博物館の協力を得ました。関係者に厚く御礼申し上げます。

2頁)、明治22年まで地区内のどこに置かれていたのかは明らかにできなかった。

⁷ 法律上、自治体としての郡と郡会が廃止されたのは大正12年4月1日だが、島根県は大正15年7月1日まで郡役所を残置し郡行政の継続を図った(『新修島根県史 通史編2 近代』島根県、1967年、63頁)。

⁸ 前掲渡吉正「石見銀山御料大森代官所遺跡と天保十二丑年の両御陣内亀絵図」187頁及び前掲『石見銀山資料館のあゆみ』98頁。

⁹ 前掲『史跡石見銀山遺跡 代官所跡修理工事報告書』5-6・13頁及び前掲『石見銀山遺跡総合調査報告書 第1冊【遺跡の概要】』151頁。

¹⁰ 石見銀山展実行委員会編・発行『輝きふたたび石見銀山展』(2007年)153頁掲載の写真に基づく。以下同じ。

¹¹ <https://igmuseum.jp/outline/> (2022年12月23日閲覧)

¹² 前掲『新修島根県史 通史編2 近代』63頁。

¹³ 『新修島根県史 史料編4 近代上』(島根県、1966年)321頁。

¹⁴ 生田光晴「近世後期大森町における屋敷地割の復原」(島根県教育委員会・大田市教育委員会編『石見銀山遺跡テーマ別調査研究報告書』4、2019年)。

¹⁵ 先述したとおり本写真の撮影者は不明だが、明治6年頃には石見では浜田で写真師が開業していたという(『浜田町史』一誠社、1935年、351頁及び島根県写真作家協会写真史編集委員会編『島根県写真史』1988年、20-21頁〈梶谷実執筆〉)。

¹⁶ 昭和初年の県道改良工事に伴い、旧代官所敷地の南側は約50センチメートル埋め立てられている(『石見銀山遺跡発掘調査概要1』大田市教育委員会、1984年)10頁。

¹ 大田市教育委員会編・発行『史跡石見銀山遺跡 代官所跡修理工事報告書』(1993年)5-6・13頁及び島根県教育委員会他編『石見銀山遺跡総合調査報告書 第1冊【遺跡の概要】』(島根県教育委員会、1999年)151頁。

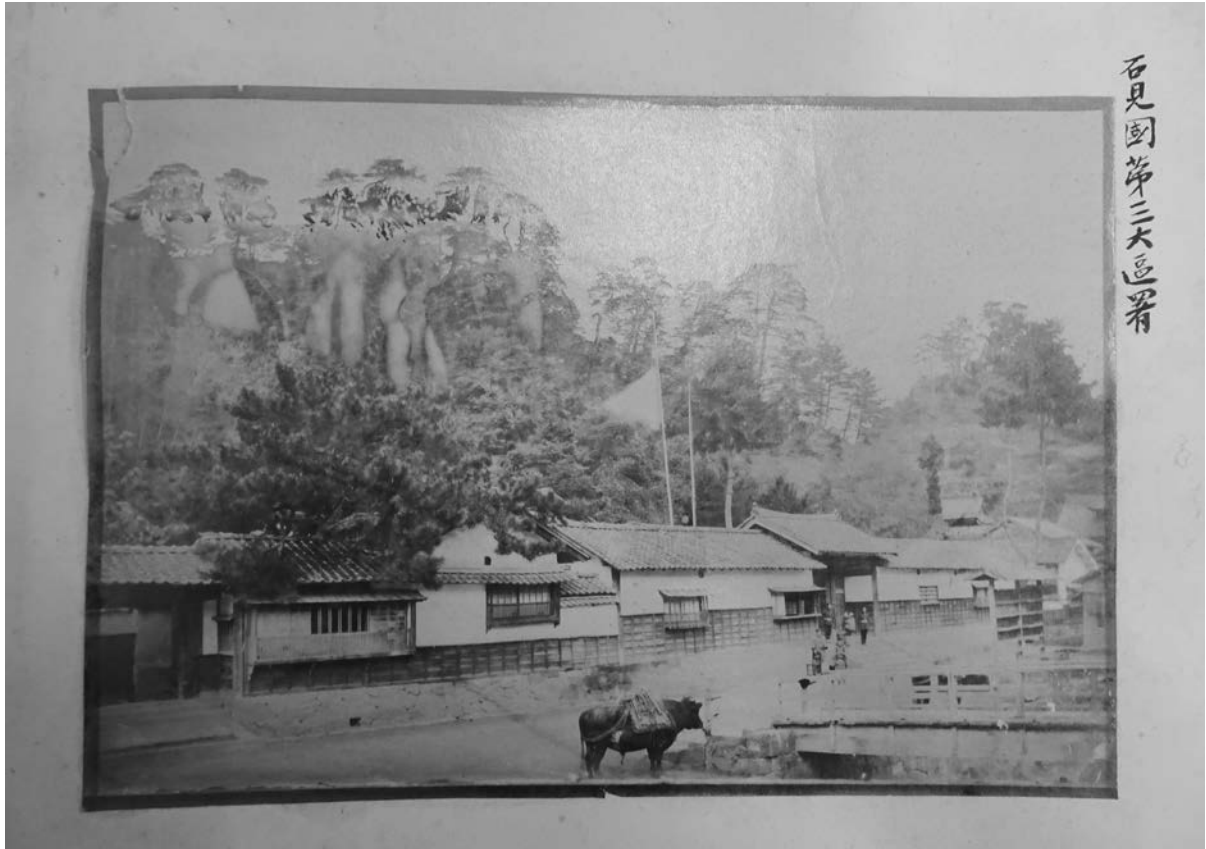
² 石見銀山資料館編・発行『石見銀山資料館のあゆみ』(1992年)98頁及び大田市教育委員会・『石見銀山学ことはじめ』編集委員会編『石見銀山学ことはじめI』(大田市教育委員会、2018年)182-186頁。

³ 『大森小学校百年のあゆみ』(大森小学校開校百年記念事業推進委員会、1972年)11頁。

⁴ 前掲『大森小学校百年のあゆみ』12・21頁。

⁵ 邇摩郡役所編・発行『島根県邇摩郡治一斑 第五回』(1911年)2頁。本資料は国立国会図書館デジタルコレクションで閲覧した。

⁶ 渡吉正によると、代官所跡地に郡役所が設置されたのは明治22年2月という(『石見銀山御料大森代官所遺跡と天保十二丑年の両御陣内亀絵図』(『日本海地域史研究』10、1990年、187頁)。第三大区役所の廃止後に邇摩郡役所が大森地区内に置かれたことは確実だが(前掲『島根県邇摩郡治一斑 第五回』



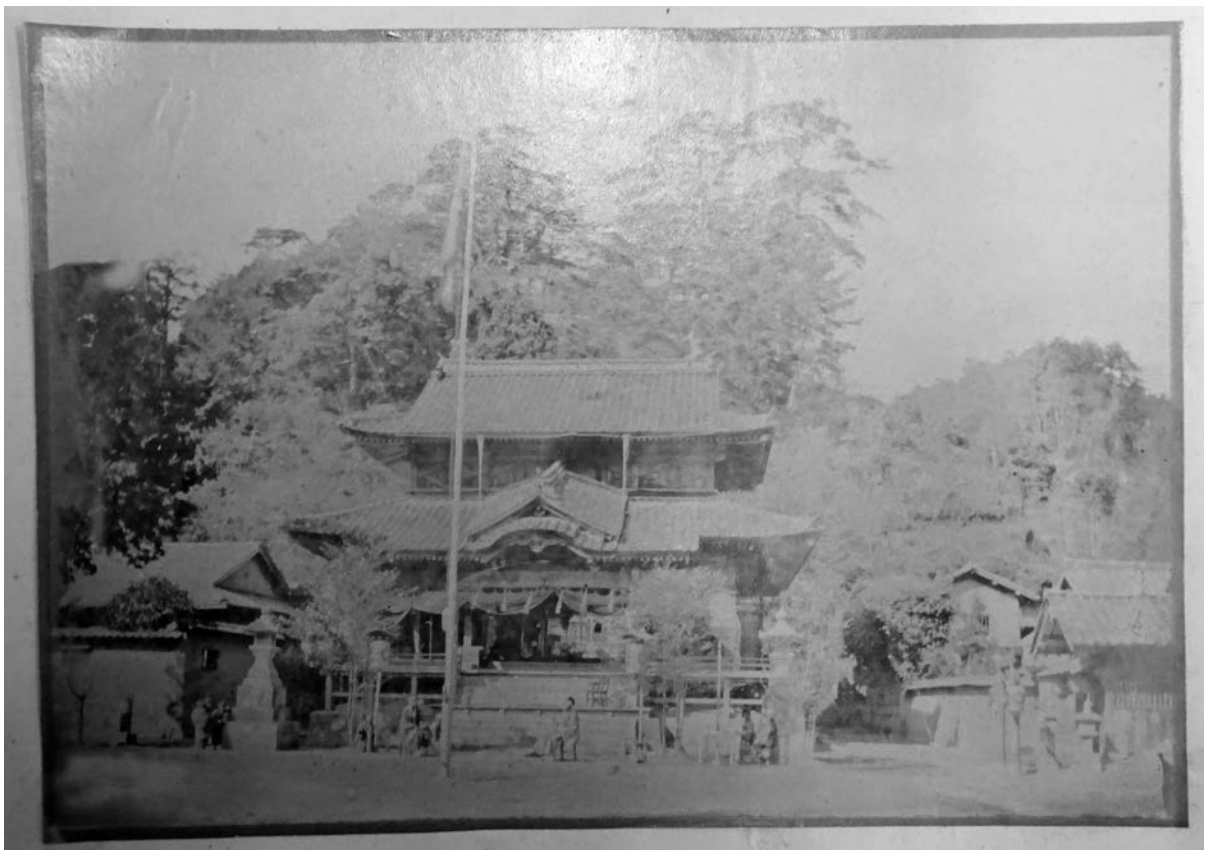
【資料1】新出の旧大森代官所表門・門長屋の古写真（島根県立古代出雲歴史博物館所蔵）



【資料2】旧大森代官所表門・門長屋の現況（筆者撮影）



【資料3】新出の旧大森代官所表門・門長屋の古写真（建物名など加筆）



【資料4】城上神社の古写真（島根県立古代出雲歴史博物館所蔵）

史料紹介 「笹ヶ谷銅山出役日記」について

清水 佳那子

はじめに

石見銀山附地役人の職務の一つに各所への出役がある。銀山御料内での出役はもちろん、大坂への灰吹銀輸送や他鉱山見分のための出役、また漂着外国人の長崎への輸送など様々な出役があった。本稿では「笹ヶ谷銅山出役日記」⁽¹⁾（以下、出役日記とする。）を素材として地役人の出役がどのように行われていたか見ていきたい。

この出役日記は横半帳であり、表紙には「文化七年四月 笹ヶ谷銅山出役日記 大住軍蔵手帳 扣 山中氏」と書かれている。表題にあるように銀山附地役人大住軍蔵による文化七年（一八一〇）の笹ヶ谷銅山出役の記録である。内容が重複している部分もあり、大住軍蔵の手帳を同じく地役人を勤めていた山中氏が書き写したものだと考えられる。地役人の出役の在り方をよく示す史料であるため、本稿の最後に全文を翻刻したものを掲載したい。

一、笹ヶ谷銅山見分について

笹ヶ谷銅山の銅山師であった堀家には大森代官や銀山附地役人が銅山視察のために来村した際に作成された入用帳等が多数残されている⁽²⁾。「大森御役所江書上由緒控」⁽³⁾には代官の多くが在任中に「銅山御見分廻村」として銅山の視察を行っていたことがわかる。銀山附地役人についても大賀・野沢・大住・鹿野の廻村に關わる文書もあることから、地役人による笹ヶ谷銅山へ出役の機会はそれなりに多

かったのではないかと考えられる。

また、江戸の勘定方役人による銅山の視察が行われることもあった。同史料⁽⁴⁾によると少なくとも寛政二年（一七九〇）に笹川運四郎⁽⁵⁾、文化七年（一八一〇）には支配勘定山木三保助と普請役落合善平、同年に勘定村田幾三郎⁽⁶⁾と普請役田澤隆助がそれぞれ銅山の視察に訪れていることを確認できる。

本稿で取り上げる出役日記にはこの内の文化七年における支配勘定山木三保助と普請役落合善平による銅山視察の事が記されている。この二人は本文に「御代官御出府跡取締御役人」とあるように、当時代官であった上野四郎三郎が借財一件⁽⁷⁾により江戸へと戻った後の大森陣屋取締りのために派遣された役人である⁽⁸⁾。出役日記によると今回の行程はまず嶋津屋から江津まで浦々を視察し、その後笹ヶ谷銅山の視察、それが終わると備後国上下へと向かうというものであった。地役人である大住はこの内の郷田村から笹ヶ谷銅山までを同行しており、出役日記にはその間の事柄が記録されている。

二、出役日記の内容について

次に、出役日記の内容を見ていきたい。出役日記は文化七年三月二十六日から四月十四日までの約半月間の事柄を日記形式で記したものであり、簡単に整理すると次の通りである。

三月二十六日 地役人元締の組頭から山木・落合による銅山見分の付き添いを命じ

られる。

四月三日 出役雑用銀を受け取り、大森から笹ヶ谷銅山までに先触を出す。

四月四日 大森を出立し、郷田で山木・落合と合流。郷田で止宿。

四月五日 三隅で止宿。

四月六日 高津通り人丸（高津柿本神社カ⁹）を参詣した後、横田で止宿。

四月七日 山木・落合は中木屋で止宿。

大住は先に笹ヶ谷銅山へ行き、銅山師らへの申渡を行う。また、悪天候により急遽山木・落合の翌日の宿を銅山内で手配する。

四月八日 本舗の見分。

山木・落合が到着し、水拔や本舗四ツ留・焼窯・吹屋を案内する。製錬も視察。山木・落合より銅山師へ申渡がある。銅山で止宿。

四月九日 山木・落合が備後上下へ出立のため、畑ヶ迫村御境まで見送る。その後銅山へ引き返し、惣代のものへ申渡。笹ヶ谷から大森へ向けて先触を出す。

四月十日 石ヶ迫大水抜の見分。銅山役所を出立し、益田で止宿。

四月十一日 浜田で止宿。

四月十二日 郷田で止宿。

四月十三日 大森に帰着。組頭（大賀・野沢）へ届出。勘定村田幾三郎へ報告。

四月十四日 出役雑用銀の残銀を返上。

今回の視察の目的は産出量が減少している銅山の現状調査であった。前回の勘定方役人笹川運四郎による視察の際も産出量の増加を指示されていたが、それからも年々減少しており、特に前年の産出量が大幅に減少していたことが問題とされていた。この文化七年の視察の際に笹ヶ谷銅山側で作成された史料もあり、視察の詳細を知ることができる¹⁰。

銅山内の各施設を視察した山木・落合は産出量増加のために出精することを銅山

師へ指示した。また、地役人の大住に対しても鋤頭¹¹から平下財に至るまで一同を呼び集め、採掘方法等について論じるよう指示している。その後、石ヶ谷大水抜で切場が堅石であるため難儀している様子を見た大住は、切り方や道具について指導したことが記されている。具体的には「切形之儀^者銀山と違、甚々素人と相見」¹²、鉄子等の焼方も宜しくないため、柑子谷永久十六番で使用している鉄子のことを教えたとある。銅山視察ではこうした細かい技術の指導を行う場合もあり、鉾山知識を持つ地役人に出役が命じられたのであろう。由緒書¹³によると大住は寛政十年に兄の跡職相続を仰せ付けられ銀山附役人となり、文化十一年（一八一四）には山方掛となる。山方掛とは主に鉾山の採掘や運営に関わる係であり、専門的な知識を必要とされる業務を担っていた。大住が出役を命じられた当時はまだ山方掛ではないようだが、それに相当する知識を見込んでの任命だったのではないかと考えられる。

また、笹ヶ谷銅山へと向かう道中で高津代官や横田組郡奉行と面会した際の対応についても記されている。高津代官・横田組郡奉行が川端や代官町入口までそれぞれ挨拶に出向いたときには大住・山木・落合の三人とも駕籠から出て挨拶している。また、旅宿へ郡奉行や代官が見舞いに来た際にもそれぞれの座敷へ通し、「同輩」の挨拶をしたことが記録されている。このような記録から幕領外で地役人がどのような立場であったのか考察することもできるだろう。

おわりに

本稿では出役日記から出役の一連の流れを紹介した。銀山附地役人による出役の記録は地役人家の史料群に何点か確認できる。また、こうした出役に限らず、地役人の職務に関係する書類を読み解いていくことで石見銀山附地役人の実態がより明らかになるのではないだろうか。

- (1)文化七午年四月「笹ヶ谷銅山出役日記 大住軍蔵手帳扣」(山中家文書史料番号 一―二二二、大田市教育委員会寄託)。
- (2)岩城卓二「堀家文書史料解題 3 大森代官所支配・近隣諸藩関係」(津和野町教育委員会『第一期堀家文書史料調査事業報告書 堀家文書史料調査目録 第一分冊』二〇二〇年)。
- (3)安政二年「大森御役所江書上由緒控」(堀家文書史料通番一)。津和野町教育委員会『第一期堀家文書史料調査事業報告書 堀家文書史料調査目録 第一分冊』二〇二〇年に掲載されている翻刻を参考にした。
- (4)注三と同。
- (5)『寛政重修諸家譜』によると普請役をつとめ、のち佐渡の広間番より支配勘定に移り、寛政五年(一七九三)には勘定、その後勘定吟味方の改役となる。
- (6)『柳營日次記』(国立公文書館蔵)では文化七年(一八一〇)正月十二日に牧野備前守から「上野四郎三郎御代官所為取締」として村田幾三郎と山木三保助がそれぞれ褒美を受け取っていることを確認できる。
- (7)藤原雄高「コラム上野四郎三郎借財一件」(藤岡大拙監修『島根県の合戦』いき出版、二〇一八年)。
- (8)注六と同。
- (9)益田市高津にある神社。柿本人麻呂を祀る。「角川日本地名大辞典」編纂委員会『角川日本地名大辞典32 島根県』一九七九年。
- (10)安田家文書(史料番号一―一六七)。仲野義文「石見笹ヶ谷銅山に関する基礎的研究―主として宝暦・明和期を中心に―」(島根県教育委員会・大田市教育委員会『世界遺産石見銀山遺跡の研究1』二〇一〇年)、仲野義文「解題 安田家文書について」(島根県教育委員会編集・発行『石見銀山歴史文献調査報告書17 石見銀山附地役人高木・長野・安田家文書目録』二〇二二年)。
- (11)堀子や跡向(手子や柄山負)などに日々の指図を行う者(津和野町教育委員会『堀

家文書史料調査目録一』二〇二〇年)。
 (12)島根県教育委員会編集・発行『石見銀山歴史文献調査報告書 石見銀山附地役人 由緒書』二〇〇五年。

【凡例】

- ・本史料は文化七午年四月「笹ヶ谷銅山出役日記」(山中家文書史料番号一―二二二)を翻刻したものである。
- ・本文には適宜、読点(、)並列点(・)を加えた。
- ・底本の体裁を原則としたが、史料の意味を変えない範囲で形式の統一をはかった。
- ・字体は原則として常用漢字を用いたが人名・地名については原文のまま表記した。
- ・異体字・俗字・略字・合字のうち、扣(ひかえ)・勺(より)については原文のまま表記した。

【翻刻】

(表紙)
 文化七午年四月
 笹ヶ谷銅山出役日記

大住軍蔵手帳 扣

山中氏

午三月廿六日

申談御用向有之候間出勤可致
 旨組頭兩人勺書面差越候^二付
 直^三出勤致し候事

一、御代官御出府跡取締御役人

支配勘定山木三保助殿・御普請
役落合善平近日笹ヶ谷

銅山^江御見分有之候間、為

附添罷越可申旨被申間候

同晦日

一、出勤之上組頭分申間候^者明朔日

出立候^而嶋津屋分江津迄浦々

御見分有之、直^三銅山^江御越

之積相決候間、四月四日郷田村

迄罷越一緒^三銅山へ案内

可致旨申間候事

四月三日

一、銀百貳拾貳匁 包銀

是^者出役雑用銀として相渡

候^二付、受取書差出銀子受取候事

一、先触左之通り差出候事

覚

一、駕籠人足 式人

一、分持人足 老^一人

ノ

右^者御用^二付明四日朝六ツ時

大森出立笹ヶ谷銅山^江罷越候条

書面之人足差出、且渡船川

越等之場所前宿分心附差支

無之様可被取計候、此先触

早々順達、我等着候節可
被相返候、以上

銀山附役人

午四月三日 大住軍蔵印

大森分

笹ヶ谷銅山迄
宿々

問屋中
年寄

泊り附

二月四日 郷田 拾里

同五日 三隅 七里

同六日 横田 六里

(以下、重複している部分)

一、今朝出立前所へ見舞候事

一、今朝五ツ時出立、益田昼^二而

高津通り人丸^江参詣、七ツ

時横田村^江罷越、且横田村^者

去八月焼失いたし候^二付、御宿^三

可相成内老軒之外無之趣前

宿^江申出候^二付間取等承合候

処、間数有之候由申之^二付

承届候事

附、着上両所へ見舞候事

(重複している部分はこちらまで)

同七日 笹ヶ谷

同四日

今朝出立、七ツ時郷田村^江

着、直^ニ御勘定・御普請役へ

見舞候事

郷田村

御勘定

塩谷

御普請役

藤右衛門

花屋

大住軍蔵宿

利八

同五日

一、今朝出立前鳥渡所^江見舞

候事

一、今朝六ツ時郷田村出立、浜田昼

^ニ而暮六ツ時三隅^江罷越候事

附、着之上^江所へ見舞候事

御勘定宿

御普請役宿

油屋

大住軍蔵宿

与七郎

同六日

一、今朝出立前所^江見舞候事

一、今朝五ツ時出立、益田昼^ニ而

高津通り人丸^江参詣、七ツ時

横田村^江罷越、且横田村ハ

去八月焼失いたし候^ニ付御宿^ニ

可相成内志軒之外無之趣

前宿^江申出候^ニ付間取等承

合候処、間数有之由申之^ニ付

承届候事

附、着之上^江所見舞候事

横田村

庄屋

宿 潮十郎

一、高津へ罷越候節、川端^江高津

代官出張有之候^ニ付、御勘定

御普請役・拙者とも駕籠^江出、

挨拶致し候事

一、横田村^江引移り候節入口^江代官

町中程^江横田組郡奉行出張

有之、同様取計候事

一、旅宿^江も郡奉行^并代官

被見舞候^ニ付御勘定・御普請役

拙者共銘々座鋪^江通し

応対いたし候事、尤何れ^江も

同輩之挨拶^ニ取計候

同七日

一、御勘定・御普請役ハ横田村

出立、中木屋村止宿之事

御勘定宿 弘中伊兵衛

御普請役宿 同人新宅

一、拙者儀^者早朝出立、笹ヶ谷銅山へ

罷越、何角取調申度旨御勘定へ

申入置、直^ニ銅山役所へ罷越候事

一、銅山師共一同登山いたし候^二付

申渡候^者 先年笹川連四郎殿

銅山見分後追々直増等被仰

付候得共、年々出銅相減候^者銅山

師共差はまり薄稼方不情^二

思召候間一同申合出情致^二し、急度

増方^二相成候様稼方・吹方共出

情可致旨申渡候事^二

一、御勘定・御普請役明八日銅山見

分有之、又々中木屋村へ引取之

積、兼申置候得とも道筋殊之外

難所、其上風留強手番ひ不^二宜^二付

銅山^二御宿之儀段々吟味致

候処、勘場甚右衛門・鍛冶屋惣次方相

応之^二居宅^二可成御宿^二可成由

申之^二付直^二見分致し、右旨

惣代佐伯惣太郎^江申合、中木屋村

^江差向為相伺候処、不自由^二も

不苦旨被仰聞候^二付甚右衛門・惣次

^江御宿申付候事

同八日

一、今朝鎚頭之もの召連、本鋪見

分致し候事

一、御勘定・御普請役中木屋村出立

四ツ時頃銅山へ被罷越候^二付、銅山

師ハ一同山分御境迄出迎として

差遣ス、拙者義^者相田恵十郎一

緒^二石ヶ谷之曾根迄罷越、遠

見にて水拔御案内申上候

一、銅山御着之上本鋪四ツ留口^并

焼窯・吹屋共御案内申上候事

一、前日夕甚右衛門・惣次^江申付置吹方

御目^二懸候事

勘場

御勘定宿 甚右衛門

御普請役宿 惣次

一、今日銅山御見分有之^二付御勘定

御普請役共銅山師呼出、情々^二

稼方出情可致儀ハ勿論、此先

ケ様^二仕法附候得ハ出銅増方

^二も可相成、然一同評議致存寄

之趣有之候ハ、早速銀山方

役所^江可申遣旨被仰渡、右

^二付拙者方^江も尚又呼出申

渡候ハ、鎚頭其外平下財等^二

至迄一同呼集、稼方存附候義

とも申論し、存寄場所も有之

候ハ、早速可申出旨申付置候

此外吹方等之儀^二付御好之書

類等も有之候^二付書上候一件扣ハ

壹冊ニメ心覚致し置候事

同九日

一、銅山見分首尾能相濟今朝

出立、広嶋通備後上下へ御越

ニ付畑ヶ迫村御境迄相田恵十郎

同道ニ罷越御暇乞申上、直ニ銅

山へ引取、尚又惣代之もの共呼出

手抜なく稼出情可致旨申渡候事

一、十王堂村はつれ江津和野代官出

帳候事

一、御用向相濟、明日日出立罷帰

可申積、先触差出候事

同十日

一、今朝石ヶ谷平大水拔江甚右衛門

召連見分致し候処、誠ニ当時切

場殊之外堅石ニ擣取兼

候義相違なく相見候、併し

切形之儀者銀山と違甚夕素人

と相見、勿論鉄子杯焼方も不直

ニ付柑子谷永久拾六番江差向

候鉄子焼形之儀荒増申教置候

一、右見分相濟銅山役所へ引

取支度致し、直に出立致し益田

泊り罷帰候事

益田宿

土田屋

伊三郎

同十一日

浜田宿

新町

豊屋

伊右衛門

同十二日

郷田宿

花屋

利八

同十三日

一、今朝郷田村出立、七ツ時分帰着、

直ニ大賀・野沢へ相届置、御勘

定村田幾三郎殿部屋へ罷出

銅山之様子荒増申上候、山木

公之書状相渡申候

同十四日

一、御役所出勤致し雑用仕上ケ

相濟、残銀返上致し候事

覚

豎紙もの

一、丁銭七百八拾八文

上下式人午四月四日分
同十三日迄九泊り九昼分

此米壹斗三升五合 但 壹人^ニ付白米七合五勺、壹升^ニ付平均五拾八文三分七厘

一、同六百九拾三文 日数右同断木銭

但 壹人ハ一泊三十五文一昼十七文、
壹人ハ一泊り十七文一昼八文宛

一、同壹貫六百八拾文 大森分笹ヶ谷銅山迄往返駄賃

一、同壹貫文 雇小もの壹人

但 日数十日、一日百文宛

一、同貳百拾五文 蠟燭拾丁代

一、同八百五拾貳文 私領四泊り木銭米代之外
心附一泊り貳百十三文宛

メ五貫貳百貳拾八文

此銀四拾九匁九厘 但 壹匁^ニ付平均百六文半替

内

銀百貳拾貳匁 出立前受取候分

差引

七拾貳匁九分壹厘 返上

右^者鹿足郡笹ヶ谷銅山御用

ニ付往返雑用仕訳書面之通

御座候、以上

文化七午年二月 大住軍蔵 印

大賀覚兵衛殿

野沢左源太殿

覚

何月何日夕分 一泊一昼分
何日 昼迄

一、白米壹升五合 此上下式人様分

但 壹升^ニ付

此代

一、銭七拾七文 木銭

但 上御壹人一泊三十五文
一昼十七文、下御壹人
一泊十七文、昼八文宛

右之通被成御渡奉受取候、以上

何村

宿

何ノ何月 たれ 印

是^ハ御料私領不限相払、右之通

受取印形為致候事

一、駄賃之儀^者御料所相除

私領之内計賃銭払

帳面印形取置候事

【付記】

本史料の掲載にあたり、史料所有者の山中孝友様にご高配を賜りました。末尾ながら記して御礼申し上げます。

世界遺産石見銀山遺跡の調査研究 13

Iwami Ginzan Silver Mine Site Research 13

令和5（2023）年3月

編 集 島根県教育委員会（松江市殿町1番地）
大田市教育委員会（大田市大田町大田口1111番地）

発 行 島根県教育委員会
島根県教育庁文化財課世界遺産室（TEL0852-22-5642）
URL <http://www.pref.shimane.lg.jp/sekaiisan/>

印 刷 株式会社報光社

